

大分県立埋蔵文化財センター

研究紀要

3

願成院の密教仏画 1

綿貫俊一

横尾貝塚出土の壺形埴輪について

服部真和

埋蔵文化財センター概要（平成30年度）

埋蔵文化財センター要覧

大分県立埋蔵文化財センター

研究紀要

3



埋蔵文化財センターキャラクターの愛称が
公募で「レキシカくん、マイカちゃん」に決定

目次

口絵

願成院の密教仏画 1	綿貫俊一	1
横尾貝塚出土の壺型埴輪について	服部真和	39
埋蔵文化財センター年報（平成30年度）		43
埋蔵文化財センター要覧		60

願成院の密教仏画 1

綿貫 俊一

序

2018年12月5日、筆者は「竹田の願成院に凄い仏画がある!」という興奮気味の友人に連れられるようにして竹田市の市街地にある願成院を訪れた。願成院は、筆者が小学生から高校生の頃、病院への通院や買い物で竹田の街に訪れた際に方形の本堂である愛染堂を訪ねたことがあるので知っていた。しかし願成院を市街地の丘の上にある小さな四角いお寺という遠い記憶しかなかった筆者は半ば半信半疑で訪れたというのが実情である。

願成院には、仏教の經典に記された内容や発展的に感得した尊格を絵にしたものや、高僧・祖師の姿を絵にした仏画がある。このうち前者は立体的な仏像と同様に視覚へ訴える本尊として崇拝の対象となり、後者は実在した歴史上の高僧・祖師を仏のような存在として深く尊敬を集め信仰されていた。このような仏画と、かつて熊本県立美術館が作成した願成院の調査台帳を拝見した。その際は時間の関係もあり、瞥見しただけであるが、両部曼荼羅図・星曼荼羅図・大元帥明王像・五大力吼菩薩・五大明王像・五大虚空藏曼荼羅図・天弓愛染明王像・孔雀明王像・天河弁才天像・金光明最勝王経曼荼羅図・光明真言曼荼羅図・一字金輪仏頂図・勝敵毘沙門天像・刀八毘沙門天像・真言八祖像・理源大師像等々、また数々の水墨画や大日如来像や愛染明王像本尊等の彫刻など、近世の仏画を主体とする実に多様で多彩、その数は優に数百を超える驚くべき質量の寺宝であると感じた。

筆者は、かつて密教が栄えた県北の地にある博物館に勤務していたが、その時に同僚が展示していた仏画の優品を興味深く見たことがある。それと願成院の仏画を比べてみても、県内で見たことのない例が大半であった。後藤任職に願成院の歴史をお聞きすると、「伝法灌頂も行ったことのある岡領の祈祷寺で、河内高貴寺の慈雲尊者とも法類の関係にありました。」という。おそらく、願成院における仏画所蔵の形成は、同院が岡領における核心的な寺院であったこと、江戸時代の豊後国内でもまれな伝法灌頂行うほどの高い寺格を有していたことと無関係ではないだろう。

願成院で見た仏画についての美術史的な調査研究は、2006年に、前記の熊本県立美術館が体系的な調査を行っている¹⁾。一般公開については竹田市立歴史資料館で2008年(平成20)7月3日から同年7月27日まで開催された『岡藩願成院秘蔵展』で極一部が紹介されたほかは(竹田市教育委員会2008)、春・秋の御開帳時に仏画の数幅と古文書が公開されているに過ぎない。このように願成院の密教関係の寺宝が十分に周知・研究され、文化財として正当な評価・価値付けが与えられていなかった。こうした現状に鑑み、筆者が所属する大分県立埋蔵文化財センターで協議のうえ、2019年(令和元)12月17日から翌年の5月17日までの間、選りすぐりの願成院所蔵の密教仏画を5回に分けて展示することになった。

本論は、大分県立埋蔵文化財センターによる展示に関連し、願成院の仏画の全貌を紹介し、その意義について考察することに起草の動機がある。

1 愛宕山願成院と周辺の寺

大分県内の仏教文化は、国東半島、大分、臼杵、大野川流域を中心として古代から中世に高貴寺・真木大堂・両子寺・岩戸寺・国分寺・金剛宝成寺・神角寺・風早の墓堂などの寺院が建立され、隆盛している。そうした仏教寺院の隆盛に連動するように、熊野摩崖仏、財前家墓地、臼杵石仏、菅尾石仏、普光寺

摩崖仏などの摩崖仏・石仏・石塔なども多く造立され、石の多い大分県の仏教文化を特徴づけている。江戸時代になると、古代・中世的な仏教から大名領国体制のなかでの寺を中心とした寺請制度が始まり、その制度において庶民はいずれかの寺の檀家として所属することが義務付けられる。一方、大名などの支配階層にも墓地のある菩提寺があり、先祖供養が行なわれる一方で、利益祈願や一族の繁栄、領国の自然災害、工事の無事、戦の無事などを目的とした祈祷寺も建立している。

祈祷は、真言宗や天台宗系の寺院などで護摩木を焚いたり、壇を築き結界をはったりして行なうが、竹田市の高野山真言宗受岩山願成院もこうした加持・祈祷を行った岡領の祈祷寺であった（写真1、写真2）。しかも並の寺では行われない結縁灌頂²・四度加行³のほか真言密教の秘儀を伝授する伝法灌頂⁴をも行なうなど格式の極めて高い寺であったため（写真3）、他領内から灌頂を受けるべく願成院の門弟となるものもあった。この願成院が建立されたのは元和4年（1618）のことで、場所は岡城址西の丸跡から北へ延びる尾根の上で、岡城を南北で挟む二条の川のうち、北側を東流する稲葉川の右岸側で城に続く尾根である。いわば岡城からすれば城の総構内ともいえる軍事上の要地である。このような要地に願成院以外の寺が立地していないことから、同寺が岡領にとって公的な加持・祈祷を取り仕切る役目を担った最も重要な寺として意識的に最も近い場所へ設置したことが窺える。そのため開基の翌元和5年（1619）には、100石が与えられるが、これは江戸時代の終わりまで続いたようである。

江戸時代に宗教的な権威をもっていた願成院も、明治時代が始まると一変する。新政府により神仏習合の慣習が禁止され、神道と仏教、神と仏、神社と寺院をはっきり区別することを目的に神仏判然令（神仏分離令）という法令が慶応4年3月13日（1868年4月5日）から明治元年10月18日（1868年12月1日）間に次々とだされた。これは大分県内でも例外ではなく、宇佐神宮境内にあった弥勒寺が廃寺に追い込まれた他、現在の豊後大野市大野町浅草八幡社にあった阿弥陀三尊像が願成院に移されている。このように神社と寺、御神体と仏像の分離が進められていたためであるが、あわせて各地に散らばった寺領も失うことになった。竹田市八幡山に



写真1 岡城と願成院位置図（天明7年絵図）

2019「願成院本堂（愛染堂）秋季御開帳」レジュメより

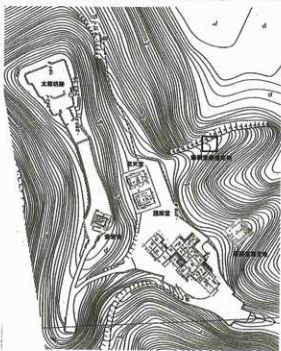


写真2 江戸時代の願成院の堂宇

2019「願成院本堂（愛染堂）秋季御開帳」レジュメより



写真3 願成院所蔵の文書と書

右上：四度加行と結縁灌頂

右下：伝法灌頂 左：慈雲の書と箱

あった金剛寺大勝院は明治2年(1869)に廃寺となった。岡城の一角にあった願成院も、明治3年(1869)5月、当時の岡領知事であった中川久成の指示により、八幡山の金剛寺大勝院跡地に移転が決まり、明治7年(1874)大勝院の堂であった愛染堂を本堂とする形で移転した。その後、鷹匠町にあった泉福寺も併合している。また、今日、不動山妙見寺が竹田駅裏にあるが、ここにも中世に遡る秦廣山東洞寺不動院という



写真4 現在の願成院本堂(愛染堂)

寺が幕末までであったが、やはり明治時代になると廃寺となり、明治16年(1883)頃まで荒れて無住状態であった。その後、明治24年(1891)になって不動院妙見寺として再出発している。このように神仏判然令の実施により、明治時代における寺院は統廃合を含めた再編成の時代でもあった。

江戸時代の岡領内で頂点に等しい格式を有した願成院であるが、存続か廃寺かの瀬戸際まで追い込まれたものの、今日まで厳しい時代をくぐり抜けてきたのであった。そして移転前・移転後を含め、開基以来、大きな火事もなく、歴代住職の尽力や実質的に併合した大勝院などを含めた大量の什物が集積され、大切に守り伝えられてきたのである。願成院が所蔵する仏画の表装裏や収納箱に記された墨書を見ると、その由来がわかるものも多い。その内容から①岡領の祈祷寺であったことに伴い歴代の領主から仏画を寄付された場合、②格式の高い寺であったためか岡領以外の領主から仏画を寄付された場合、③自己資金で購入が推測される仏画の場合などがあった。これを、【如来】、【菩薩・明王・天部】、【高僧部】、【垂迹・雑部】に分けて、願成院が集積した仏画の種類から同院を中心とした岡領における密教・修験の実態をみるが、今回は如来部から明王までを対象とする。

近世仏教仏画については、2004年3月30日に六角堂能満院の憲海らが作成した膨大な仏画粉本が出版され、またその研究編ともいべき博士論文が松尾芳樹により2014年度に公開された(京都市立芸術大学芸術資料館2004、松尾2014年度)。これらは、いわば近世後期の京都で仏画を描いた側の状況を解き明かす起点となった画期的な研究である。一方、願成院が所蔵する仏画の研究は、実際に使われた寺側の状況を解き明かすことに繋がるとともに、停滞する近世の仏画研究に寄与すると考える。

2 如来と関連する仏画

(1) 両部曼荼羅

まず曼荼羅といえば、胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅を指し、二幅一具で両部曼荼羅として修法の際に用いる。実際の修法の際には、道場と呼ばれる室内の中央に壇、その北側の向こうに本尊が位置し、東壁に胎藏界曼荼羅図、西壁に金剛界曼荼羅図を対面するように掛ける。こうした二幅一具の両部曼荼羅の多くは空海が惠果(唐の青龍寺)から授かった曼荼羅の形を伝えている。その特徴は、胎藏界曼荼羅では中台八葉院を中心として、外側へ「院」という方形区画なかに尊格が描かれるが、金剛界曼荼羅では九つの「会」と呼ばれる方形区画内のうち理趣会を除く八会に大きい円相があり、その中の小円相内に尊格や仏具

(三昧耶形)を描き、理趣会は方形区画の中に中尊が方形区画で、周りの八つの小円相に尊像を描いている。願成院には二幅一具の両部曼荼羅が甲本(写真5・6)と乙本(写真7・8)の二つある。その図像的な構成は、基本的に現図曼荼羅を厳格に踏襲しているが、尊像の彩色、尊像の周辺にある紋様については変化に富んでいる。甲本のうち胎藏界曼荼羅の彩色は、中台八葉院の八葉蓮華は朱色で、その外側は緑系統の萌黄色である。中台八葉院を囲む遍知院・持明院・蓮華部院(観音院)・金剛部院とその外周に位置する釈迦院・虚空藏院は紫系統の桔梗色、その外側の文殊院・地藏院・除蓋障院・蘇悉地院は萌黄色、そして最外院は桔梗色となるなど、萌黄色と桔梗色を繰り返すことでメリハリをつけている。また甲本の文様は、最外院にはなく、釈迦院・虚空藏院が麻の葉文であるほかは組手方形文を戴金による地紋としている。一方、甲本の金剛界曼荼羅の彩色は、各会の外縁部分で桔梗色を背景色とし、対角線上に位置する各会の主要な背景色として萌黄色を用いている。また名高い高尾曼荼羅を始めとした現図曼荼羅と同様、最上段の一印会・理趣会・四印会において各辺の中央から外側へ T 字形の部分が突出しているが、これは古代中国の宇宙観である「天円地方」に基づくもので、天を支えていることを表している。インドで別々に成立した金剛頂経と大日経を金胎両部の大経として唐・青龍寺の恵果がまとめたことはよく知られており、古代中国で「天円地方」の宇宙観も取り入れて現図曼荼羅が最終的な形として成立したことを示している。

乙本の彩色は、胎藏界曼荼羅中台八葉院の八葉蓮華は赤紅色で、その外側は金箔を貼る。遍知院・持明院・蓮華部院(観音院)・金剛部院とその外周の釈迦院・虚空藏院は赤黒色、その外側の文殊院・地藏院・除蓋障院・蘇悉地院は緑青色、そして最外院は紺青色となる。乙本の金剛界曼荼羅の場合も色づかいは対角線上の各会円相外を緑青色に彩色し、十字上に隣接する各会は金箔を貼り付ける特徴がある。乙本の文様は、胎藏界曼荼羅：中台八葉院・文殊院・地藏院・除蓋障院・蘇悉地院と理趣会除く金剛界曼荼羅



写真5 胎藏界曼荼羅図両部曼荼羅図甲本



写真6 金剛界曼荼羅図両部曼荼羅図甲本

の各会では截金で組手方形文を地紋として表す。

以上、両部曼荼羅の甲本・乙本は、金箔や截金を多用すること、多くの色を用いるなど、豪華で華麗な曼荼羅であり、願成院にとって最も重要な仏画であったことが窺える。

この他、願成院所蔵の仏画の中には、一幅の上半段に金剛界曼荼羅、下半段に胎藏界曼荼羅を種子で表した両部種子曼荼羅が7幅ある。このうち5幅は両部種子曼荼羅甲本・乙本(写真9)・丙本(写真10)・丁本(写



写真7 胎藏界曼荼羅図両部曼荼羅図乙本



写真9 両部種子曼荼羅図乙本



写真8 金剛界曼荼羅図両部曼荼羅図乙本



写真10 両部種子曼荼羅図丙本

真 11)・戊本(写真 12)・己本の紙本版画で、もう一幅は紺紙金泥両部種子曼荼羅である(写真 13)。ただし丁本と紺紙金泥両部種子曼荼羅の上段については、金剛界曼荼羅の成身会と思われる部分を抜き出して表示し、他は省略された形をとっている。両部種子曼荼羅は、甲本・乙本・丙本の本紙部分がそれぞれ 2 枚であり、他は 1 枚からなる。甲本と乙本は同版で、版本に大勝院の禎仙が種子を書き入れて完成させたのだろう。これらの作画年代は、19 世紀前半であるが、紺紙金泥両部種子曼荼羅の年



写真 11 両部種子曼荼羅図丁本



写真 12 両部種子曼荼羅図戊本

代については、墨書によれば、明治 31 年(1898)に京都の「画工北村氏」によるものである。こうした一幅に胎藏界・金剛界からなる両部種子曼荼羅は、18 世紀以前にはなく、墨書からの記載から 19 世紀前半を中心として版本から制作された可能性が高い。またその用い方は、大壇を開む左右の壁にかけることはできず、僧侶による絵解きに用いられたという意見もある¹⁾ほか、四度加行の際にも使用されている。

(2) 涅槃

仏涅槃図・仏涅槃像であるが、釈迦が跋提河のほとり沙羅双樹の間で入滅する様子を仏像・仏画としてあらわしたものであり、仏伝中の重要な一場面である。国内では法隆寺五重塔内塑像をはじめ高野山金剛峯寺本仏涅槃図など、早くからわが国で造像・作画されている。また仏涅槃図を本尊像とする涅槃会も平安時代の初めには恒例化し、仏教の開祖であることもあつてか、各宗派がその神事を執り行ってきた。願成院には仏涅槃図の甲本・乙本がある。

仏涅槃図の甲本は、箱書きに「月涅槃周信筆」・「諦考院殿御



写真 13 紺紙金泥両部種子曼荼羅

宝 鷲峯院殿御遺物 愛宕山常什」とあるので、願成院の什物であったことを示している（写真 14）。このうち「周信」がどのような画工か分からないが、「諦考院」と「鷲峯院」は岡領第8代領主中川 久貞（在位 1743-1790）の法名と戒名の院号であることから、18 世紀中頃の作と推定される⁹。甲本も釈迦の像容から大きくは仏涅槃図の第二型式に該当する。しかし乙本と違って甲本は、雲が平行し、会衆装束などに異国的な描画はほとんどない。また摩耶夫人が右上から雲に乗って現れるなど、乙本との図像的な距離感は大い。

乙本は、文政 6 年（1823）に大勝院十五世宥英が金剛宝戒寺本を寫したことが表装裏と箱蓋に墨書されている（写真 15）。このことから元は大勝院の什物であり、同院が明治 2 年（1869）に廃寺となるに際し、後に転居してくる願成院が管理することになったことが推測される。14 世紀前半に遡る金剛宝戒寺本仏涅槃図については山本聡美による詳しい研究があり（山本 2007）、これと乙本を比べてみると、前者（金剛宝戒寺本）では上空に月が見えるが、後者（願成院甲本）では雲間から見えるという違いがあるほか、前者では図像の前方の象付近で図が途切れ、後者では像の手前側に馬がいるなど若干の広がりがあるなど幾つかの違いがある。その一方で甲本は、会衆や動物の数が多くなり、釈迦が宝床上で右手枕をするなど、金剛宝戒寺本と同一系統の第二型式に該当する。乙本に描かれている描画は実に繊細であり、会衆の姿も異国情緒に富んでいることも特徴である。また釈迦は開目していないものの、地藏が宝珠をもって対面している場面



写真 14 仏涅槃図甲本



写真 15 仏涅槃図乙本

は山本がいう「舍利供養と結びついた南都における涅槃儀礼を前提に制作された・・」という意味でも金剛宝戒寺本と同一系統ということになる。



写真 16 一字金輪仏頂（釈迦金輪）



写真 17 一字金輪仏頂（大日金輪）

(3) 一字金輪王

一字金輪王の一字は、如来が梵字一字で説いたボロンを真言とし、金輪は王の中でも優れた金輪王を意味した一字金輪仏頂としても信仰の対象となっている。この一字金輪仏頂には、所依の經典により釈迦金輪と大日金輪の二つがあり、願成院の仏画の中にもこれに関する例が2幅ある。

一字金輪仏頂（釈迦金輪）図（写真 16）は、曼荼羅ではなく、一字金輪仏頂曼荼羅から須弥山上の釈迦金輪部分を取り出した独尊像である。海上に屹立した須弥山に難陀龍王（釈迦から見て右）・跋難陀龍王（左）が巻付き、その上に挙身光（円相）が位置し、この中の蓮華座上に頭光・白い縁取りの身光を背後に赤い僧衣をまとった釈迦金輪が半跏趺坐している。釈迦金輪は、法界定印を結び、中に宝輪を持つ形をとる。難陀龍王・跋難陀龍王の頭の上には、それぞれ3頭の蛇が出ている。

一字金輪仏頂（大日金輪）図（写真 17）も曼荼羅ではなく、一字金輪仏頂曼荼羅から主尊を取りだし、挙身光（円相）内に収まるように配置した図像となっている。図像は、五大虚空藏菩薩と同様、紺紙金泥で

ある。大日金輪は、挙身光内の蓮華座蓮肉上に火焰頭光・火焰身光を背後に、印は法界定印で、結跏趺座する。頭部には五仏宝冠をかぶり、耳の背後から肩下方向へ天冠帯を垂らしている。その他、肩から胸、蓮肉付近まで豪華な瓔珞・装身具を付け垂らす。この図像は金泥の細い線で表現しているが、とりわけ五仏宝冠・腕釧・条帛・裳部分で白くみえる部分に細かい線を密集・交差させて文様を表現している。また上品な顔立ちやバランスのとれた像容、さらに繊細な線描からは、絵仏師の極めて高い技量と、その仏画制作に対する真摯な面影をも感じ取ることができる傑作である。大日金輪については、金剛界大日如来を中尊とする場合も多いが、胎藏界大日如来を主尊とした醍醐寺本大日金輪像（重要文化財）と図像的に近く、願成院本一字金輪仏頂（大日金輪）図とした由縁である。箱書きには「・高祖大師一千年遠諱・」のために天保五年（1834）八月に「画者京師高橋氏・」が河内高井田寺で寫し描いたことを弘化三年（1846）前後、大勝院十八世であった禎仙が書き記している。したがって本図は、天保五年（1834）八月に描かれたことがわかる。



写真 18 星曼荼羅図



写真 19 光明真言字輪曼荼羅図

(4) 星曼茶羅図

星曼茶羅図は、個人や国家社会の命運を支配するとされた北斗七星をはじめとした諸星を方形もしくは円相内に配したもので、北斗曼茶羅ともいう。旱天、洪水、地震などの天災や広く息災・延命を祈る北斗法の本尊としてかけられた。円形の曼茶羅は天台座主の慶円が創図したといういわゆる慶円系で、方形の曼茶羅は仁和寺寛助が作図したという寛助系とされ、主尊は、一字金輪王（大日金輪または・釈迦金輪）である。構成は、四院からなり、一院の主尊から、北斗七星と九曜、十二宮、二十八宿が順に配置されている。

願成院の星曼茶羅図（写真18）は、円形をした慶円系に連なる図像であるが、中央の一院から外側の四院に尊格が配されている。通例、一院には釈迦金輪、二院に北斗七星と九曜を配するが、本図の一院（最も内側の院）には主尊の他に北斗七星を加え、さらにもう一星の小さな輔星がある。そのためか二院には一つ少ない九曜が描かれている。主尊は、難陀龍王（釈迦から見て右）・跋難陀龍王（左）が巻付く須弥山の上に挙身光（円相）があり、この中の蓮華座の上に火焰頭光・火焰身光を背後に赤い僧衣をまとった釈迦金輪が半跏趺坐している。なお、本図の箱（蓋）には箱書があり、それによると安政三年（1856）岡領主中川久教が願成院へ寄贈したことが記される。また色合いは鮮やかであり、江戸前期・中期へ遡る古色を感じさせない。

(5) 光明真言

光明真言は、菩提流志訳『不空羼索神变真言经』や不空訳『不空羼索毘盧遮那仏大灌頂光真言』が所依の經典で、過去の一切十悪五逆四重諸罪や、一切の罪障を除滅し、地獄・餓鬼・修羅に生まれ変わった死者に光明を及ぼして西方極楽浄土に導き、病人から、宿業と病障を除滅するという功德・利益がある。よく知られているのが「土砂加持」法で、土砂に向って光明真言を誦することで法力を付与し、これを病人に授けて苦惱を除滅させ、また死体や墓の上にはばらまいて亡者の罪を除滅させる。中国では唐代から行われ、日本でも鎌倉時代以後盛んとなっており、光明真言を刻んだ板碑などや滋賀県明王院本：紙本着色光明真言功德絵詞（応永5年：1398）がある。その成立の背景には、平安時代の終わりに末法思想の広がりがあり、「南無阿弥陀仏」と唱えるだけで悪人も救われると説く法然らの浄土教の法解釈に危機感を抱いた明恵上人など、密教側の対抗措置といわれている。



写真20 五色光明真言曼茶羅図

こうした光明真言に関する曼荼羅は願成院において二幅確認している。一つは光明真言字輪曼荼羅図(写真19)で、その構成は三つの部分から成り立っている。本紙の上方には、天蓋、その下の中央には、蓮華座・蓮肉上の上に乗る大きく赤い円相内に金泥で描いた光明真言二十四の梵字を円周状に配置し、その内側に金泥で書いた五字真言(a vi ra hūn khām、ア・ビ・ラ・ウン・ケン)を、向かって中央・下・左・上・右の順に書いている。その下に、小さい蓮華座・蓮肉上に乗る白い小円相が左右にあり、中にウーン(左)とカーン(右)の梵字が金泥で書かれており、あたかも脇侍状に配置している。本紙上の彩色や状態からは中世に遡るような古色は窺えず、江戸時代中期以降の作画と推定する。

この他、願成院には光明真言系の曼荼羅として上位の円相内真言が下方の大日如来から延びる線で包まれる五色光明真言曼荼羅図がある(写真20)。五色光明真言曼荼羅図には、A類:上下二段の尊像(下段:胎藏界大日如来、上段:金剛界大日如来)例、もしくは、B類:下段の胎藏界大日如来と上段の円相内字輪曼荼羅があり、いずれにおいても下段の胎藏界大日如来を多数の線が半円形に包みつつ上方へ立ち上がり、上段部に五色の光をあてるものである。その際、多数の線は五つの帯状束にまとめ、五色の色で彩色するのである。願成院本の五色光明真言曼荼羅図は、下段の胎藏界大日如来と上段の円相内字輪曼荼羅の場合であるが、紙本版面に梵字の部分だけ墨描きしただけで彩色にはいらず、そのまま表装し完成としている。

以上、光明真言系の曼荼羅を二幅示した。光明真言に関する仏画には、鎌倉時代の光明真言字輪曼荼羅、鎌倉時代の板碑に遺存例があるものの、絹本や紙本の軸物で江戸時代の17世紀まで遡る例は管見では知らず、『六角堂満院仏画粉本』の収載例もあり、18世紀から19世紀前半に収まるのではないかと推定する。五色光明真言曼荼羅図については、福島県相馬妙見歡喜寺には真言律宗を中興したといわれる浄厳が開眼の歡喜寺本五色光明真言曼荼羅図があり、相馬市の有形文化財に指定されている。浄厳は17世紀後半に活動の中心があり、その頃まで五色光明真言曼荼羅図が遡ることになる。しかし概ね、18～19世紀前半に作画された傾向が多いと考える。

(6) 金光明最勝王経曼荼羅図

金光明最勝王経曼荼羅図は、正法によって国王が政治を行えば国は豊かになり、釈迦牟尼仏(釈迦牟尼如来)・天鼓音仏・四天王・吉祥天などの諸仏諸天善神たちが国を守護してくれるということが説かれている義浄訳『金光明最勝王経』を所依の經典とする。そのため鎮護国家の經典として奈良時代の国分寺などで盛んに修されていた。しかし金光明最勝王経曼荼羅図には、『国宝金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図(岩手県大長寿院蔵)があるが、ほかの作例はほとんど知られていない。その数少ない遺存例についても変異、系統などの違いが窺える。共通するのは、画像の中心軸上に塔を配し、その周囲に諸仏諸天善神を配している点であるが、後述するような例は中世に遡る例は管見ではなく、江戸時代後半以降に創図された可能性がある。こうした金光明最勝王経曼荼羅図は、願成院に甲本と乙本の二幅を確認している。このほか主尊が如来ではないために後記するが、画幅の上部中央に「大金光明最勝王経」と墨書し、その下に邪鬼を踏んだ毘沙門天、前方に脇侍として吉祥天(左側)と善膩師童子(右側)を配置した例がある。金光明最勝王経曼荼羅図甲本(写真21)の構成は、三段からなり、上段・中段・下段の中央域には大小の塔が配置されている。うち上段には、虚空に浮かぶ天蓋を中心に飛天や琵琶・笙・鼓などの楽器が舞い、下に金箔を貼った如意宝珠の中の堂と、それをとりまく諸仏が坐する。堂の中には、「大金光明最勝王経」・「諸佛之母(左扉)」・「諸法之父」と書かれた板が蓮華座上に載る。所依の經典に記された諸佛諸善神は、

上段に釋迦牟尼佛・寶相佛・阿閼佛・阿彌陀佛・天鼓音佛・妙幢菩薩・梵天王・天帝釋・堅牢地神・正了知大將・吉祥天・辨財天、中段には四天王が塔を囲むように坐する。金光明最勝王經自体は、密教の經典ではないが、この曼荼羅には两部曼荼羅の胎藏界・金剛界に属する仏が描かれていることが注意される。塔の左右には宝珠を上に乗せた大きな宝棒のようなものが立つ。塔は基壇のような台上に赤い三脚台を乗せ、その上に蓮華付きの塔を乗せている。最下段は前方の幅が狭く、一見すると緑色系の色をした連



写真 21 金光明最勝王經曼荼羅図 甲本



写真 22 金光明最勝王經曼荼羅図 乙本

続する菱形で充填された表装の一文字のような部分に見えるが、おそらく襷を敷き詰めた間であろう。ここに小さな赤い三脚の台上に四脚の蓋付の鉢が置かれている。

金光明最勝王経曼荼羅図乙本は（写真 22）、上から天蓋、その下に蓮華座に乗る巨大な宝珠があり、これを向かって右に「諸法之父」、左に「諸佛之母」と記した牌が囲む。その下に中央：釋迦牟尼如来、右上：東方阿閼佛、右下：南方寶幢佛、左上：西方阿彌陀佛、左下：北方天鼓音佛の五佛が配置される。その下に向かって右に梵天王、左に天帝釋が位置する。その下の中央軸で中に宝珠を入れた三脚の宝塔があり、それを囲むように右列の上から堅牢地神、吉祥天女、左列の上から正了知大将、辨才天女、その下の右列上から西方廣目天王、北方多門天王、左列の上から南方增長天王、東方持國天王を配する。さらに一段下に三脚の台上に三脚の蓋付鉢を置く。

金光明最勝王経曼荼羅図の甲本と乙本とも上空にリボンのように天衣で蝶結びした笛・笙・鼓・琴などの和楽器、空中を舞う飛天か、翻りながら舞落ちる花卉、舞い落ちる小さな宝珠、多数の諸佛諸善神からなる賑やかで浄土のような仏の世界が色鮮やかに描かれているのが最大の特徴である。図像的に、ほぼ同様の構成を有するものが『六角堂能満院仏画粉本聚成2004』にあり、こうした金光明最勝王経曼荼羅が数は少ないながら広がっていたのだろう。

(7) 十三仏来迎図

十三仏来迎図は、冥界の王をもとにしてその審理に関わる13の尊像である。また、この尊像は、十三回の追善供養（初七日～三十三回忌）をそれぞれ司る尊格としても知られ、仏事に十三仏の仏画を本尊としている。十三仏は、概ね天蓋の下に虚空蔵菩薩（左）・阿弥陀如来（中）・阿閼如来（右）、その下に勢至菩薩（左）・大日如来（中）・観音菩薩（右）、その下に



写真 23 十三仏来迎図甲本

弥勒菩薩（左）・釈迦如来（中）・薬師如来（右）、その下に文殊菩薩（左）・普賢菩薩（右）、その下に地藏菩薩（左）・不動明王（右）と並ぶが、整然と並ぶ場合と少し崩れた場合がある。福井県小浜市の萬徳寺本は整然と並ぶ場合で、南北朝時代に遡る事例である。少し崩れた場合は、飛雲に乗って降下してくるといふ来迎図の型式をとっているようで、近世に多い。阿弥陀如来を始めとした顕教系に信仰主体がある尊格に、密教系の尊格を組み合わせて、十王信仰に乗る形で密教的な葬送・供養儀礼の方法を考案したことが窺える。

願成院には三幅の十三仏に関する仏画があり、いずれも雲に乗り降りてくる乗雲来迎形式である。また十三仏の構成は、概ね上記したような配置をとっている。十三仏来迎図甲本は、中廻し・一文字・中柱・筋という装飾的な部分と本紙部分が版画となっており（彩色のみ手描きカ）、表装は天地・風帯だけである（写真23）。装飾的な部分のうち、中廻し・中柱の文様には赤を背景とし、鳳凰・透かし亀甲文・桐があしらわれており、極めて豪華で吉祥なおめでたい図柄であり、こうした特徴が中近世の仏画に存在することについては寡聞にして知らない。更に加えるならば、中廻し・一文字・中柱・筋と本紙部分が同じ紙の版本であることは、桓武天皇・伝教大師像が天地総縁・風帯・本紙同一の紙に印刷しているなど、技法的に共通する部分があり、後者に明治28年（1895）付けの栞（しおり）が添付されていることからすれば、その年に制作され寺院・信者に配布された可能性が高く、甲本も近代の作画であろう。その十三仏来迎図のうち、不動明王像は焰光で、それ以外の尊格は頭光を背後に配する。不動明王の体は空色で、裳は松葉色である。菩薩の体は白を基調とした象牙色で、身に着けた天衣・条帛や裳は麴塵色である。如来の場合は、螺髪・肉髻が瑠璃紺のほかは基本的に金泥である。座は、不動明王が低い瑟瑟座であるが、他の諸仏は蓮華座である。

乙本は、白黒の版画で、内側に十三仏、その外側に幅狭い枠が廻る。外側の幅狭い枠には、下半に蓮華、上半に左右から上る龍二頭



写真 24 十三仏来迎図乙本

が描かれ、上一文字の中央真下付近で如意宝珠を挟んで向かい合う様子が描かれる（写真 24）。本例は通常の表装方法をかなり省略しており、近代の作画例と推定する。丙本は、白黒版画であり、尊像配置の構成は、甲本・乙本と共通するが、まくり状態の版本である（写真 25）。他のまくり本から六角堂能満院の作画と考えたいが、六角堂能満院の粉本の中にはみられず、明確ではない（京都市立芸術大学芸術資料館 2004）。

(8) 釈迦三尊十六善神像

釈迦三尊十六善神像は、中央に釈迦三尊（釈迦如来・普賢菩薩・文殊菩薩）を描き、その前に法涌・常啼の二菩薩、玄奘三蔵とその侍童、深沙大将を置くほか、左右八体ずつの十六善神を対照的に並べて



写真 25 十三仏来迎図（下図）丙本



写真 26 釈迦三尊十六善神像

おり、玄奘三蔵法師が訳した『大般若経』を転読する法会（大般若会）の本尊とされた。

願成院の釈迦三尊十六善神像は（写真 26）、釈迦三尊の両脇に十二神将や四天王で両側を囲み、他に法涌・常啼の二菩薩、玄奘三蔵とその侍童、深沙大将を配置する。そのほか特定できていない尊像が配置されている。釈迦如来は、施無畏と願印をし、蓮華座上に結跏趺坐する。文殊菩薩は、青紺桔梗色毛獅子の背の蓮華座に半跏趺坐し、両手で蓮茎を持つ。普賢菩薩は、蓮華座を乗せた白象に結跏趺坐し、両手で如意を持つ。色彩は、三尊の場合、釈迦の螺髪・肉髻や頭部・垂髪が瑠璃紺色のほか納衣類は基本的に金泥で、截金文様もみられる。一方、その他の尊像の彩色は、赤、青、黒、緑系統の色、金泥を基本に色合いを変化させた賑やかな色構成である。また主尊の左手の形状、その蓮台の形状・線描、諸尊が立つ壇の文様をみると長谷川賀一郎（等叔）の作である不動明王甲本と共通するほか、同じく賀一郎の作である愛宕権現曼荼羅図で勝軍地藏の袖部にみられる青地に白い花紋状の紋様が釈迦十六善神像における地藏菩薩の一部着衣文様と全く同じである。これらの点から願成院本釈迦三尊十六善神像は、天保 12 年（1841）10 月 10 日に 58 歳で死去した長谷川賀一郎（等叔）の作であり、岡領最後の領主（12 代）中川久昭が寄付したことを願成院十四世祐通が箱書に記している。そのうち寄付年代については、中川久昭が天保 11 年（1840）12 月 6 日に領主職を継いだ点と、長谷川賀一郎の没年を勘案すると、領主になって間もなく発注・寄付したことになる。したがって願成院本釈迦十六善神像は、長谷川賀一郎の最晩年の天保 12 年（1841）の作画ということになる。

(9) 薬師十二神将像

薬師十二神将像は、玄奘三蔵訳『薬師如来本願経』を所依の經典とする。薬師如来本願経には、釈迦が薬師如来の功德を説いたときに、それを聞いていた十二薬叉大将がその如来を供養する人を守り、一切の苦難から解き願いをかなえることを誓ったとあり、薬師十二神将像の構成はこれにちなむ。図像としては、蓮華座上に結跏趺坐もしくは半跏趺坐した薬師如来のやや前方両脇に日光菩薩・月光菩薩が位置し、片側に武装した神将六軀ずつ計十二軀を両側縦方向に配置させている。十二神将は、官毘羅大将（金毘羅）・伐折羅大将・迷企羅大将・安底羅・



写真 27 薬師十二神将像

頌備羅大将・瓏底羅大将・因達羅大将・波夷羅大将・摩虎羅大将・真達羅大将・招社羅大将・毘羯羅大将であるが、持物と頭部に着けた十二支の冠との組み合わせは様々で、描かれた尊格名の特定は困難である。

順成院の薬師十二神将像は（写真 27）、一幅を確認しており、構成は上記のとおりである。主尊の薬師如来は、八角形かと推定される懸々座上の蓮華座の上に上品下生說法印（左手に薬壺）をとり半跏趺坐する。また背後に頭光・身光、雲文のある舟形光があり、主尊の上には天蓋がある。体躯が木蘭色、舟形光は金泥、納衣・裳の表面は黄土色であり、金を意識した彩色である。十二神将の彩色は、真紅、青藍、天鷲絨と鮮やかな彩色表現である。なお、頭部に着けた十二支冠の構成は向かって右上から子・丑・寅・卯・辰・巳、左上からは亥・戌・酉・申・午・未である。この、薬師十二神将像は、長谷川賀一郎（等叔）の作である不動明王像甲本と同じ箱に入っていたこと、彩色表現、顔の描画表現が賀一郎の愛宕権現に酷似し、彼による 19 世紀前半の作と推定される。

3 菩薩・菩薩に関連する曼荼羅

(1) 忿怒相（仁王經）の菩薩

『仁王經（仁王般若波羅蜜經）』は、『法華經』・『金光明最勝王經』とともに奈良時代から平安時代にかけて護国三部經と言われ、国家の安泰を願う「鎮護国家」の根本經典とされた。その後、地域の安寧を祈願する鎮守の儀式として仁王会・仁王講が執り行われたことで地方にも広がる。この仁王經は、鳩摩羅什訳の旧訳仁王經（『仁王護國般若波羅蜜經二卷』）と不空訳の新訳仁王經（『護国仁王般若經二卷』）があり、うち旧訳仁王經受持品を所依の經典とし、五大力吼菩薩を本尊とするのが仁王会・仁王講である。この仁王会・仁王講自体は斉明天皇6年（660）に始まった国家的大事の法会で、その後、空海による密教請來後の



写真 28 五大力吼菩薩像 甲本

9世紀後半には天皇の即位に際しても行われた。また10世紀には天変地異に際し行われ、11世紀には春秋と定期的に行われるようになっていく。この仁王会の本尊が密教請来以前の奈良時代において、柔らかな菩薩相であったのか、忿怒相だったのか分かっていないようであるが(沖松 2011)、密教請来後は忿怒相である。平安時代初頭の有志八幡講本(高野山)や鎌倉時代初頭の和歌山県普賢院本では、各尊像を一幅ずつ計五幅に描かれているが、新しくなると一幅に金剛吼菩薩を中尊とする五菩薩が描かれる。

願成院には甲乙二幅の五大力吼菩薩像が伝わり、うち甲本は(写真 28)、図画的に「高野山綾摺

坂之図」(六角堂能満院仏画粉本仏教図像聚成 2004)とされる図像表現に酷似する。また乙本は、甲本と尊像の姿勢・所作が同様である(写真 29)。五大力吼菩薩甲本・乙本とも、中尊が金剛吼菩薩、向かって右上が北方の雷電吼菩薩、右下が東方の無量力吼菩薩、左上が西方の無畏十力吼菩薩、左下が南方の龍王吼菩薩である。中央の金剛吼菩薩を初め、各尊像は一面二臂で、髪は逆立った焔髪で、片方の手先は剣印、もう一方の手には金剛輪などの法具をもつ。また金剛吼菩薩は火炎頭光・火炎身光を背に瑟瑟座上の蓮華座に半跏趺坐するが、他の諸尊は片足を踏割蓮華座の上で踏ん張り、もう片方の足は上げる。甲本の彩色は、金剛吼菩薩：体軀・麴塵(淡い緑灰色)・条帛・濃藍・天衣・天鷲絨(くすんだ緑)・裳・紅蔦(暗い赤系色)、雷電吼菩薩：体軀・薄桜・条帛・紅蔦(暗い赤系色)・裳・濃藍と金泥による毘沙門亀甲紋・天衣・濃藍、無量力吼菩薩：体軀・胭脂(薄い赤系色)・条帛・豆がら茶・天衣・天鷲絨・裳・木蘭色、無畏十力吼菩薩：体軀・濃藍・条帛・白糠・天衣・天鷲絨・裳・紅蔦(暗い赤系色)、龍王吼菩薩：体軀・木賊色(暗い濃い緑)・条帛・霞色地に鉄紺(濃い紺系色)・天衣・裳・紅蔦(暗い赤系色)を基本的な



写真 29 五大力吼菩薩像 乙本

彩色とする。これに金泥で細密な文様を条帛・天衣・裳に加えている。乙本の彩色は、金剛吼菩薩：体軀・薄桜（淡い桃色）・条帛・紅鸞（暗い赤系色）・天衣・緑青色・裳・藍媚茶（灰黒系色）、雷電吼菩薩：体軀・薄桜・条帛・紅鸞・裳・緑青色・天衣・紅鸞、無量力吼菩薩：体軀・薄桜・条帛・紅鸞・天衣・緑青色・裳・藍媚茶、無畏十力吼菩薩：体軀・紺青・条帛・紅鸞天衣・緑青色・裳・藍媚茶、龍王吼菩薩：体軀・緑青色・条帛・霞色地に鉄紺（濃い紺系色）・天衣・鸞・裳・紺青を彩色としている。また乙本の場合、火焰光の表現を淡い肌色に彩色した後に濃い赤色の描線で表現するなど、簡略化している。彩色は、明るい色使いであることが特徴である。五大力吼菩薩甲本・乙本の彩色をみだが、体軀の彩色に関しては金剛吼菩薩と無量力吼菩薩が異なるものの、他は似た色遣いをしていることが窺える。

(2) 観音菩薩

古来、観音菩薩は、「〇〇観音」として日本人には最も親しみのある菩薩であろう。観音菩薩が所依とする経典は、観音経・般若心経・観無量寿経を代表とし、また浄土教系では勢至菩薩とともに阿弥陀如来の脇侍でもある。しかし一口に観音と言っても、密教の六観音を構成する千手観音（餓鬼界）、馬頭観音（畜生界）、十一面観音（修羅界）、聖観世音（地獄界）、如意輪観音（天界）、准胝観音・不空罽索観音（人間界）を含め、様々な変化形がある。

願成院には、十一面観音菩薩、如意輪観音菩薩、聖観世音菩薩、准胝観音菩薩という四種類の観音菩薩が描かれた五つの独尊図像が確認できた。しかし通例、密教で重視される馬頭観音や千手観音、六観音については未確認であり、願成院における特徴である。

十一面観音菩薩は、紙本彩色であるが、墨線で体軀・持物・瓔珞などの輪郭を描き、彩色途中で中止されたまくり状態の図像である（写真 30）。したがって寄贈・注文によって入手された図像ではなく、また尊顔が都風ではなく、地方的な顔立ちであり、願成院の住職が描いた完成途上の図像の可能性が高い。

如意輪観音菩薩は、不空訳『観自在菩薩如意輪瑜伽』と金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽要』を所依とし、通例、坐像または半跏像で、立像はまず見かけない。右側片膝を立てた六臂の像が多く、6本の手のうちの2本に、尊名の由来である如意宝珠と法輪とを持っている。6本の手のうち、右第一手は頬に当てて思惟手を示し、右第二手（如意手）は胸前で如意宝珠、右第三手（念珠手）は外方に垂らして念珠を持つ。一方、左第一手（光明山手）は掌を広げて



写真 30 十一面観音像（版本）

地に触れ、左第二手（蓮華手）は蓮華、左第三手（金輪手）は指先で輪宝・法輪を支える。また左足裏に片膝を立てた右足裏と合わせるという輪王坐である。これが如意輪観音の基本的な像容である。願成院には如意輪観音菩薩の甲本（写真 31）と乙本（写真 32）があるが、概ね上記したような像容である。甲本・乙本とも如意輪観音菩薩が海上に屹立した岩座上の蓮華座に坐している。細かな違いは次のとおりである。①火炎如意宝珠については、甲本が小台の上に一個持つのに対し、乙本は小蓮台上に三個持つ。②金輪については、甲本が手の平で支えつつ親指から薬指で扶むのに対し、乙本では親指から中指で突出部を摘まむ。③顔の表現については、甲本がふつくらと庶民的な面貌であるのに対し、乙本は都風の菩薩顔。甲本は、箱書きに豊後国府内領 6 代領主松平近壽が寛政6年（1794）7月に作画したもので、府内領の祈祷



写真 31 如意輪観音像 甲本



写真 32 如意輪観音像 乙本

寺であった福寿院が旧蔵していたものである。乙本は、「真言五図」銘の箱に入っていた五幅のうちの一幅で、天保5年(1834)に行われた「奉為弘法大師一千年忌…」のために作画された仏画である。

来迎図は、本来、阿弥陀如来を主尊とする三尊が西方極楽浄土にお迎えにくる様子を描いた図で、仏説観無量寿経が所依の經典である。平安時代中期に阿弥陀信仰、浄土教が広まる中で成立した図像と考えられるが、多分に他宗派でもその影響が見て取れる。

来迎図と密接に係ると推定されるのが願成院の聖観世音菩薩来迎図である(写真33)。これは、紫雲に乗った独尊の来迎図であり、類例は知らない。あるいは、欠いている主尊の阿弥陀如来、右側脇侍の勢至菩薩とともに、阿弥陀三尊来迎図の左側脇侍として三幅一具の一幅であった可能性もある。絹地に墨線で図像を丁寧に描き、赤緑系の彩色をしている。



写真 33 聖観世音菩薩来迎図



写真 34 准胝観音像

准胝観音菩薩は、経軌には観音という名で説かれていないことから、天台系では「仏母」と呼ぶ。真言宗では、空海が高野山に准胝堂を建て、准胝観音を僧侶が得度する際の本尊としていた。また「六観音」の一尊に加えられている。准胝観音を本尊とする准胝法では、除災延命のほか、子孫繁栄や安産の功德があるという。

願成院の准胝観音像は一幅で、元は別の寺に伝わったのか、表装裏に「・・・龍成和尚画工 弘化四丁 来秋・・・天徳十寶・・・(墨消)・・・とある(写真 34)。現在、豊後大野市緒方町に天徳寺があるが、関係があるのかもしれない。図像は、海中から伸びて赤く咲く蓮華座の上に一面十六臂で半跏趺坐している。第一手が准提観音印をするが、他は仏具を持つ。背後には頭光・身光があり、また宝冠から上に伸びる雲の上の小さな蓮台上に真言・種子を書いた円相が乗る。その両脇には、飛天が舞う。蓮華座の下に難陀龍王(右)・跋難陀龍王(左)と思われる文官風の脇侍が片手で支えるような所作をとっている。願成院本は、三目で五智宝冠をかぶるので、正しくは准胆仏母とするべきかもしれない。作行は、線描・色彩ともに優れている。

(3) 虚空蔵菩薩

虚空蔵菩薩(Akasagarbha)自体は、無限の智恵と慈悲を持った菩薩という意味で、智恵や知識、記憶の面で利益をもたらす菩薩として信仰された。修業時代の空海が唱えた虚空蔵求聞持法の本尊である。五大



写真 35 虚空蔵菩薩像 甲本



写真 36 虚空蔵菩薩像 甲本と箱

虚空蔵菩薩像は、虚空蔵菩薩の五つの智慧を五体の菩薩で表現しており、所依の經典は、金剛智訳『五大虚空蔵菩薩速疾大神驗秘密式経』・『理趣経十八会曼荼羅』で、後者は神護寺の五大虚空蔵菩薩坐像とほぼ一致することが指摘されている。その画像としての構成は、上位に天蓋を配し、四つの宝瓶で囲んだ円相を配置し、その中に十字形に小さな円相が並び、中に法界虚空蔵菩薩(中央)・蓮華虚空蔵菩薩(西方上)・宝光虚空蔵菩薩(南方右)・金剛虚空蔵菩薩(東方下)・業用虚空蔵菩薩(北方左)を配しており、金剛界曼荼羅における五智如来の正法輪身とされる。この菩薩像は、息災・増益などの祈願の本尊として信仰されている。

願成院本の虚空蔵菩薩には甲本(写真35)と乙本(写真37)があり、いずれも虚空蔵求聞持法の本尊を示す墨書が表装裏にある。その像容は、挙身光(円相)内の蓮華座上に半跏趺坐し、頭に五仏宝冠、左手に3個の火焰宝珠をのせた白蓮華、右手は予願印であることも同様であり、同一系統の作例であろう。甲本は、豊山御絵所の仏画師であった「森田重三郎易信」が1859年(安政6)に描いたことが記される。乙本は、唐寛作と箱蓋墨書があるが、詳細は不明。

五大虚空蔵曼荼羅図(写真38)は、紺紙金泥の図像で、四つの宝瓶が囲む円相内に十字形に並ぶ小円相(挙身光)が五つ配置され、中の蓮華座上に火焰頭光・火焰身光を背後に虚空像菩薩が描かれた図像である。宝瓶の口からは蓮華と思われるものと広葉樹の葉が活花状に出、その上に五鈷杵の片側が出ている。各菩薩の持物は、法界虚空蔵菩薩(中央):一個の火焰宝珠がのった開敷蓮華と三鈷戟、蓮華虚空蔵菩薩(西方上):一個の火炎宝珠と三鈷戟、宝光虚空蔵菩薩(南方右):火焰羯磨と三鈷戟、金剛虚空蔵菩薩(東方下):一個の火炎宝珠と三鈷戟、業用虚空蔵菩薩(北方左):一個の火焰宝珠と三鈷戟である。図像は、細い筆先で細かい部分まで繊細に描かれている。図像としては、上述した『理趣経十八会曼荼羅』と共通する。

(4) 普賢延命菩薩像

普賢延命菩薩は、サンスクリットを訳した大安楽不空真実菩薩(Vajramoghasamayastva)のことで、胎藏界曼荼羅の遍知院にも描かれている。この尊格は、安楽な命が生成されることから「普賢延命菩薩」と呼ばれている。また普賢延命菩薩は、密教では増益や延命を祈る普賢延命法という修法の本尊で、所依の經典は不空訳『普賢延命金剛最勝陀羅尼経』である。普賢延命菩薩像の



写真37 虚空蔵菩薩像 乙本

像容は、通例天台系の二臂と真言系の二十臂からなり、前者は3面1頭の象、後者は4頭の白象によって支えられている。

願成院本の普賢延命菩薩は、最下段に小さな白象多数が輪宝状の盤を支え、その上に頭に四天王を載せた4頭の白象が支える蓮華座であり、さらにその上に一面二十臂で五仏宝冠を被る普賢延命菩薩像が結跏趺坐する(写真39)。なお、普賢延命菩薩が着座する蓮華座は、半身光からはみでている。4頭の白象であることと、二十臂の普賢延命菩薩像であることから、願成院本は真言宗系の仏画ということになる。なお、箱書に明治31年(1898)2月吉祥日、画工京師北村氏とあるので明治時代の作例ということになる。

(5) 五字文殊菩薩像・文殊菩薩像

「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があるように文殊菩薩(manjushri)は、智慧の仏として単独で信仰を集めるほか、普賢菩薩とともに釈迦如来の脇侍として祀られた。密教では通常、童子形を表し、四種ある真言(一・五・六・八字)それぞれに応じるように頭の数の髻を結う像がある。このうち息災を祈願する五髻文殊が最も普通である。像容は、右手に智慧を象徴する剣、左手に梵夾(サンスクリット語の經典)を載せた蓮華を



写真 38 五大虚空藏曼荼羅図



写真 39 普賢延命菩薩像

つまみ、蓮華座上に結跏趺坐する例が多い。これに加え、蓮華座上の五字文殊菩薩を獅子が背に乗せる例も多い。

願成院本の五字文殊菩薩像は、上記の像容とほぼ同じであるが、湧き上がる雲かと思われるものの上に乗った白い半身光内の蓮華座上に半跏趺坐する(写真40)。蓮華座の蓮弁を紺・赤・緑と色を変えていく色使いは、長谷川等鶴(賀一)・長谷川等叔(賀一郎)に似た作風である。

願成院本の文殊菩薩像は、彩色をしていない版画図像で、仮表装かと思われる(番号148)。蓮華座の下部や半身光・白象等はなく、虚空にある蓮華座上に半跏趺坐する文殊菩薩像が描かれている。右手に梵夾、左手に三鈷杵を立てた蓮華をつまみ持っている。

4 明王

(1) 大元帥明王

大元帥明王(Ātavaka)の経軌は、弘法大師の『御請來目録』に『金剛部元帥大将阿叱婆俱經』三巻と記載されているように常曉以前に請來されていた。その後、常曉が唐から体系的な形で請來した修法で、「必勝祈願」や「敵国粉碎」「国土防衛」の祈願として重視され、宮中で正月に修された。大元帥明王は、「阿吽婆陁拘鬼神大将上佛陀羅尼經」一巻・「阿吽婆陁拘元帥大将上佛陀羅尼經修行儀軌」一巻に説かれる尊格であるとともに、明王・諸天の總監である。そして大元帥明王を本尊とする大元帥法は、国家の大秘法として秘密性の高い修法であったため、限られた寺で修されていた。この大元帥法は、「昭和3年(1928)11月2日今上陛下即位の御大典をとし、東寺長者松永大僧正が東寺灌頂院に於て玉鉢安穩寶祚無窮の大元帥御修法を奉修・・・」と昭和天皇即位の際にも行なったという(上田1938)。願成院の大元帥明王像は、上記した経軌に基づく大元帥法で用いられた尊像と考えられ、日本国内においても数少ない中世の作である甲本(写真41)と、長谷川等鶴(賀一)が文化十年(1813)に描いた乙本がある(写真42)。甲本と乙本は、いずれも十二匹の蛇が巻き付き、焰光を有する五面八臂の像容である。この大元帥明王を二人の餓鬼が支え、もう一人の餓鬼は、甲本:左手に梵夾・右手:筆、乙本:左手に宝篋・右手に刀をもつ。大元帥明王の上空に雷神を含む尊格が二尊、前方に二頭の狛犬が位置する。雷神の右手にいる尊格ははっきりしないが、乙本では文殊菩薩のようにみえる。また雷神の鼓が甲本ではあったのに、乙本では省略されている。



写真40 五字文殊菩薩像

大元帥明王の持ち物は、第一手：合掌印、第二手右手：縄、第二手左手：宝棒、第三手右手：宝剣、第三手左手：三鈷戟、第四手右手：三鈷杵、第四手左手：輪宝を持つ。五面の内、下の三面が主要な顔で、上二面は小さい面で、その上に如来顔の化仏が位置する。髪は焰髪である。このように甲本と乙本は大きくは同様な構成の像容であり、同一の系譜にあることが窺える。甲本は、経年使用と体軀への暗い着色もあつてか全体が暗く落ち着いた色調であるものの、凄みのある異形の図像でもある。その荒々しく闊達な描きぶりは江戸時代の長谷川等鶴が描いた明るく若々しい彩色の乙本とは大きく違い、15世紀頃には遡る作例と推定する。乙本には、表装裏に「・久通公御寄附 文化十四年了遍代」長谷川賀一、箱書に「・久貴公御寄附 文化十四年了遍代」とあるが、前者では岡領第五代領主中川久通の没年（1710年）と賀一の生年（1757年）との開きからありえず、同領第十代領主中川久貴がその没年である1787年（文化十）までに長谷川賀一（等鶴）作による乙本を寄付したと思われる。甲本・乙本の存在は、中世・近世の地方でも大元帥法の修法が実施されていたことを示すものだろう。



写真 41 大元帥明王像 甲本



写真 42 大元帥明王像 乙本

(2) 五大明王

五大明王像は、護国の經典：新訳仁王經による尊像で、中尊が不動明王 (Acala)、向かって右上が北方の金剛夜叉明王 (vajrayaksa)、下が東方の降三世明王 (trailokyavijaya)、左上が西方の大威徳明王 (yamāntaka)、左下が南方の軍荼利明王 (kundali) である。元来は別の尊格であった五尊が『仁王念誦儀軌』による「一具性のある同一の尊格とされていた・」ことを明らかにしたのは櫻田純子である(櫻田 2010)。仏画では、ちょうど仁海様仁王經曼荼羅から、明王をとり出して一幅に描いた図像である。初めは仁王經法による鎮護国家を祈る公的な修法において五つの壇に安置して行う修法であったが、次第に息災・増益・調伏など、個人的な目的にも信仰の対象となっていく。国内における五大明王は、空海が東寺に設置した所謂「立体曼荼羅」の中に最も古い例がある。

願成院には甲乙二幅の五大明王像がある。いずれも一幅に不動明王を中尊とする大威徳、金剛夜叉、降三世、軍荼利の五大明王像を描いている。五大明王像甲本は、経年使用によるのか全体が薄暗くおちついた色合いで、各尊像とも体軀自体の着色も暗い肥後煤竹・生壁色(焦茶色系)であり、その作画・使用年代の古さが窺え、室町時代に遡る可能性が高い。本例は、表装裏に廃寺になった東洞寺の什物であったことを示す墨書がある(写真 43)。その他の特徴であるが、中尊の不動明王は、右手には大慧剣、左手に綱索を持ち、瑟瑟座上に半跏趺坐する。更に、頭髮は巻髪で振り弁髪を耳の前から左胸側に垂らす。その背後に頭光と五羽の迦楼羅を表現した揺らめく焰光がある。金剛夜叉明王は、左足を曲げ上げ、右足で踏割蓮華座に立つ、三面六臂像である。その持物は、第一手：五鈷杵(右手)・五鈷鈴(左手)、第二手：箭(右手)・弓(左手)、第三手：大慧剣(右手)・輪宝(左手)を持つ。頭部は、中央の顔のみ五眼であるもの他は三眼で、その上の頭髮は宝冠を付けた焰髪である。降三世明王は三面八臂で、右足を曲げ上げ、左足とともに大自在天 (Shiva) と妻烏摩妃 (Parvati) が支えているようにみえる。



写真 43 五大明王像 甲本

第一手は降三世印を結ぶが、第二手：剣(右手)・綱索(左手)、第三手：箭(右手)・弓(左手)、第四手：独鈷杵(右手)・三鈷戟(左手)を持つ。三面それぞれに目が三眼あり、その上の頭髮は宝冠を付けた焰髪である。軍荼利明王は、左足を曲げ挙げ、右足で踏割蓮華座に立ち、外を向いた一面八臂像である。第一手で軍荼利明王印(三鈷印)を結び、第二手：与願印(右手)・鉞(左手)、第三手：刀印(剣印)(右手)・三鈷戟(左手)、第四手：五鈷鈴(右手)・輪宝(左手)などの印を表現したり、法具を持ったりしている。顔は三眼で、その上の頭髮は宝冠を付けた焰髪である。また白蛇を頭に一匹、腰に二匹巻き付けている。身に着けた糸帛・天衣・裳文様は、それぞれ唐草文・亀甲文・雷文繫文である。大威徳明王は、伏臥した牛に六足三眼三面六臂で跨るが、左第一足と第二足を曲げた半跏状態である。第一手は、左手に持った弓に箭を番えつつ、右手で引絞る。他の手は、第二手：宝棒(右手)・輪宝(左手)、第三手：剣(右手)・弓(左手)、第三手：剣(右手)・宝珠の付いた杖(左手)を持つ。第三手左手には、通例、戟の場合が多い。なお甲本の、焰光については揺らめくような表現である。

五大明王像乙本の配置は(写真44)、甲本と同じである。異なる点は、金剛夜叉明王の目が三面とも五眼、降三世明王は第四手右手に五鈷鈴、軍荼利明王は、第四手右手に五鈷杵、大威徳明王は第四手左手に三叉戟を持っている部分で、他は甲本と概ね同様の図像であり、同系統の図像と推定する。このほか乙本にみられる各尊格への彩色が青藍(濃紺色系)で統一し、火焰光の一つ一つの炎が鋭く長く伸びるなど長谷川等叔(賀一郎)・長谷川等鶴(賀一)の焰光表現にみられる作風である。軸裏に長谷川等鶴(賀一)の墨書があるので19世紀前半頃の作である。実は、この乙本と同一の図像を六角堂能満院の憲海が粉本に残しているが(京都市立芸術大学芸術資料館 2004)、その粉本に長谷川家の図像を写したことは記されていないものの、六角堂能満院の絵師たちは長谷川家の図像を大量に写して



写真44 五大明王図 乙本

いたことが知られている。五大明王像乙本は、六角堂能満院の絵師が写したのと同じ長谷川家の図像から派生した図像である。

(3) 不動明王像

不動明王像は、菩提流志が八世紀に訳した「不空羼索神变真言经」に「不動使者」として見えるのが最初である。このほか不空訳「底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法」・不空訳「護国仁王般若经（新訳仁王经）」・金剛智訳「不動使者陀羅尼秘密法」・善无畏訳「大日经」など多数の經典に登場する。不動明王像は、独尊の場合や二童子とともに描かれる場合が多く、真言宗をはじめ、天台宗、禪宗、日蓮宗、修験道で幅広く信仰されている。

不動明王像 甲本（写真 45）は、やや右前方をみた独尊の立像で、前方に切れ込みの入った二段の岩座上に立つ。左目は、すが目。頭髪は巻髪で、前よりに花冠、七沙鬘かと思われる上に頂蓮がある。巻髪から続く、ねじり弁髪を耳の前から左胸に垂らす。焰光は、曲線を最小限にして鋭くグラデーションをかけたながら伸ばしており、迦楼羅炎の表現も一ツ所みられる。表装に寛政4年（1792）に京都の画工長谷川派十二代長谷川等叔（賀一郎）により描かれたことを記している。



写真 45 不動明王像 甲本a



写真 46 不動明王像 甲本b

不動明王像 乙本(写真12)は、やや右前方をみた独尊の座像で、前方に切れ込が入った瑟瑟座上に坐す。目は両目を開く。頂蓮を付けた総髪で、耳の前から左胸に束ねた弁髪を垂らす。火焰光は、七羽の迦楼羅焔が描かれている。このような像容から、火焰頭光はないものの長賀筆「不動明王図像」醍醐寺本白描図系統で、所謂空海様の図像である。本図は、版本に彩色した図像で、真言五図として他の四幅とともに「奉弘法大師一千年忌」の為に制作と箱書きにあるので、製作年代は天保5年(1834)ということになる。

不動明王像 戊本(下図・写真48・番号20)・不動明王像 己本(下図・戊本の縮小版・写真49・番号21)は、版本であり、六角堂能満院粉本に像容の近いものがあり(番号2135・京都市立芸術大学芸術資料館2004)、あるいは同工房の作である可能性がある。不動明王像丁本(番号13)と不動明王像辛本(番号158)は、彩色と表装から近現代の作であろう。丙本(写真47・番号81)は、空海様をした座像で、彩色の手法が乙本に酷似しており、同一絵師の作と思われることから天保5年(1834)前後の製作年代が与えられる。

赤不動像は、高野山明王院の絹本画像が有名である。本例は、通常の不動明王と違い、両眼を開いて左前方を向く(写真50)。花冠を付けた髪は巻髪と思われ、ねじり弁髪は耳の前から左胸に垂らす。また右手には金剛杵、左手に罽索を持ち、瑟瑟座上に半跏趺坐する。彩色は、条帛が濃い緑、天衣が濃紺、頭光が白、頭髪・眉毛が黒で、火焰光・上半身・裳は暗い赤である。頭光の左上方の火焰光が渦巻状を呈していることが特徴である。不動明王の頭髪、火焰光中の渦巻部分は、六角堂能満院の憲海が東叡山御本坊図から写した「不動明王四十八使者図」の作風を想起させるものがある(『六角堂能満院仏画粉本仏教図像集成』2004・株式会社法蔵館)。彩色・描画技術的には江戸時代後期の不動明王図のような細かさはなく、大胆な作風で、江戸時代前期の作画と推測する。



写真47 不動明王像丙本
(不動明王二童子像)



写真48 不動明王像 戊本(下図)



写真49 不動明王像 己本(下図)

不動明王像庚本（不動明王二童子像）（写真 51・52・53）は墨の濃淡を交えて描かれた三幅一対の水墨画である。二童子のうち制多迦童子は（写真 51）、右手で金剛棒を岩座の上につき、左肘をその上において頬杖をついた特徴ある像容で、矜羯羅童子は両手で合掌印を執りながら上目遣いで不動明王をみている（写真 53）。不動明王は、巻髪の上に花冠、捻り弁髪を耳の後ろから左胸へ垂らすのは、醍醐寺にある玄朝様の白描図の系譜に近い（写真 52）。この三幅とまったく同様で、水墨画による構図は『六角堂能満院仏画粉本仏教図像聚成 2004』のなかに憲海が写した白描図がある。これについては鎌倉時代の陀摩派の画像を写したという研究もある（憲海等の図像は、長谷川派の図像を写した例も多い）。したがって憲海か、憲海と交流のあった長谷川派の作である可能性が高く、18世紀後半から19世紀初頭頃の作画と推定する。



写真 50 赤不動



写真 51 制多迦童子像
（不動明王二童子像）



写真 52 不動明王像 庚本
（不動明王二童子像）



写真 53 矜羯羅童子像
（不動明王二童子像）

(4) 不空羂索忿怒王二童子像(写真15)

不空羂索忿怒王は、不空羂索観音が変化する教令輪身で、不空羂索陀羅尼経を所依の經典とする。また不空羂索陀羅尼経には、眷属として「緊羯羅・制撻迦二童子」が配置されることを記しており、順成院本の不空羂索忿怒王は、今日不動明王の脇侍として知られる「矜羯羅童子」・「制多迦童子」に相当するものだろう。不空羂索忿怒王は立像で、一面二臂、前方右手に剣、左手に三鈷網索、後方右手蓮華か、後方左手に三鈷鼓を持ち、右前方を上目遣いで注視する。大慧剣は右肩に立てかけている。髪は総髪と思われ、前より花冠を付けている。なお、右の膝を曲げて足をあげる。このような例は、五大力吼菩薩の無畏十吼菩薩・龍王吼菩薩、五大明王の降三世明王、あるいは蔵王権現にみられる。体の露出している部分は紺色で、条帛は緑、裙は明るい赤である。焰光は、墨線で輪郭をとり、その中にやや暗い赤の顔料でグラデーション状に埋めている。「緊羯羅・制撻迦二童子」は、主尊と同様右前方に顔を向ける。「緊羯羅」は、右手に大慧刀(直刀)を、左手に網索などを持ち、僅かに左膝を曲げながら前方に足裏を向ける。「制撻迦」は、一面四臂で、髪は巻髪または五つの髻、前方一手は合掌印、第二手右手は箭(雁股矢)の矢柄、第二手左手は下に向けた弓を持っている。全体的に色が明るく汚れも少なく、箱蓋裏に「明治三十二年京師北村氏所畫」と墨書があるので明治時代の作例である。北村家には、江戸時代後期の活動が窺われる巨瀬派の北村季隆がいるが、順成院本「不空羂索忿怒王二童子像」の箱書から明治時代中頃まで同家が製作活動をしていたことがわかる。



写真 54 不空羂索忿怒王像



写真 55 天弓愛染明王像 甲本

(5) 天弓愛染明王像・愛染明王像

現世利益の仏の一つに愛染明王があり、『瑜祇経』「愛染王品第五」に説かれている。その修法は、息災・増益・敬愛・降伏の『四種法』の利益があり、罪を滅して福を生じることが記述されている。さらに『瑜祇経』では、愛染明王が愛欲を否定せず、煩惱を方便として衆生界を救う尊格とされる。そのため愛染明王信仰は、「恋愛・縁結び・家庭円満」について行われるほか、古くは遊女、現在では水商売の女性も信仰しているという。願成院には、弓矢を天に向けた天弓愛染明王像甲・乙二幅と通常の愛染明王像一幅がある。

天弓愛染明王像甲本（写真1）は、火焰頭光・火焰身光を背後に一面三目六臂で蓮華座上に結跏趺坐する。ハート形の蓮弁である蓮華座が円相内からはみ出ており、僅かに虚空に留まって、直下の宝瓶から宝珠があふれている。そのため、円相があたかも円光背状となる。六臂の持物は、左右第一手が右手



写真 56 天弓愛染明王像 乙本



写真 57 愛染明王像

に三鈷杵・左手に五鈷鈴、第二手では未敷蓮華(右手)・金剛拳(左手)を握っており、中に摩尼宝珠を隠し持っているという。第三手は、二の筋(右手)を掴みつつ一の筋を天弓(左手)に番える。明王の尊顔は口を開け、怒りの表情をしており、その引き締まった体躯とのバランスが絶妙である。髪は炎髪で、正面に金剛三鈷鉤を付けた獅子頭を装着している。焰髪の毛線や五鈷鈴・三鈷・宝輪・箭・天弓・獅子頭は截金や金泥で彩色している。特に頭光や身光の火焰は、小さく静かに燃立つような繊細な表現であり、傑出した技能が窺える。挙身光の中は、赤色で充填され、その上に白色顔料・赤い顔料で丁寧にグラデーションをかけ迦楼羅鳥を表現している。近世における愛染明王像絵画の傑作である。表装裏や箱書に、寛政年間に慈雲尊者が禮拝していたことを尊者の法類であった願成院十三世有智が墨書している。作画年代については慈雲の出生である享保3年(1718)より少し前の「正徳4年(1714)甲午…」との年代が表装裏に記されているので、18世紀前半代の作であろう。

天弓愛染明王像乙本(写真16)は、一面三目六臂で蓮華座上に半跏趺坐する。火焰頭光・火焰身光はない。第一手:三鈷杵(右)・五鈷鈴(左)、第二手:未敷蓮華(右)・金剛拳(左)、第三手:箭と弦・天弓であり、円光背に火焰の表現がない。そのほか、内容は甲本と同様であるが、構図の背景は白い空間となる。

愛染明王像は、一面三目六臂で、背後には頭光・身光を配し、蓮華座上に結跏趺坐する。第一手:三鈷杵(右)・五鈷鈴、第二手:箭と弦・天弓、第三手:未敷蓮華(右)・金剛拳(左)、で、円光背に細かい火焰の表現がある。そのほか、内容は甲本と同様で、構図の背景は白い空間である。頭光の縁取りに鱗状の単位が二重にあり、赤・緑・黒色を充填している。箱書に大勝院十六世禎仙が天保十四年(1843)五月に作らせたことを示す墨書がある。

註

- 1 熊本県立美術館が2006年に三日間の日程で行った調査は、展示を視野に入れた資料調査だったのか、報告書は出版されていない。その調査成果を示すものとしては、軸物と仏像関係を中心とした写真付きのカタログが竹田市教育委員会と願成院住職の手元に残されている。
- 2 結縁灌頂:どの仏に守り本尊となってもらうかを決める儀式。投華得仏という。目隠して、曼荼羅図の上に、華を抛ち、落ちた場所の仏と縁を結ぶ。
- 3 四度加行:「十八道法・金剛界法・胎藏界法・護摩の法」を習得すること。
- 4 伝法灌頂:阿闍梨という指導者の位を授ける儀式。
- 5 竹田市教育委員会の城戸誠氏の御教示。
- 6 「周信」が、狩野周信であれば、その活躍年代である17世紀後半から1728年(享保13)に死去するまでに描かれた可能性もある。
- 7 金光明最勝王経は鎮護国家の三経典(金光明最勝王経・法華経・仁王経)として、奈良時代の聖武天皇などの皇族や国分寺などで重視されていた。空海は、金光明最勝王経に関する著作『金光明最勝王経解題』にあるように、同経を重視していた。
- 8 松尾芳樹の論文『2014年度博士論文 六角堂能満院工房と律僧憲海』を参考にした。

参考文献

- 上田實隆 1938「大元帥明王の研究」『密教研究』巻67号 密教研究会 211-227
 沖松健次郎 2011「五大力菩薩」『空海と密教美術展』読売新聞社・NHK・NHK プロモーション 253-254
 京都市立芸術大学芸術資料館 2004『六角堂能満院仏画粉本』上下巻、株式会社法蔵館
 櫻田純子 2010「東寺講堂五大明王像の研究 - 軍荼利明王像の蛇の装飾を中心に -」『奈良大学大学院研究年報』第15号、奈良大学大学院 183-185

竹田市教育委員会 2008 『岡領願成院秘藏展』

松尾芳樹 2015 『2014年度 博士論文 六角堂能満院工房と律儀意海』

山本聡美 2007『金剛宝戒寺所蔵「仏涅槃図」の図像と製作背景』『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』45

大分県立芸術文化短期大学 27-43

表1 観音寺・願成院所蔵仏画リスト 1

番号	名称	時代	年代	材質	本紙	縦 (cm)	横 (cm)	備考
1	弘法大師像 甲本	江戸	天保2年(1831)	紙本着色	141.0	122.8		「弘法大師御影 天保二年 即十一月 東運山常持」表装裏書
2	1 伝教大師像(桓武天皇・伝教大師像)	明治	明治28年	紙本印刷				印刷 天地地軸・風帯・本紙同一の紙に印刷、装が付属
3	2 桓武天皇像(桓武天皇像・伝教大師像)	明治	明治28年	紙本印刷				印刷 天地地軸・風帯・本紙同一の紙に印刷、装が付属
4	理源大師像	江戸	寶暦8年(1758)	紙本版漉着色	126.4	64.2		坂原玄士両宗性善作 表装裏書
5	願成院十世慧理法師肖像	江戸	19C初カ	紙本着色	96.9	39.5		堂親法師は願成院十世 表装裏書 1806年寂
6	1 弘法大師絵伝(二幅の一)	江戸	文政12年(1829)	紙本着色	155.8	132.0		長谷川真一郎(等)編
7	2 弘法大師絵伝(二幅の二)	江戸	文政12年(1829)	紙本着色				
8	弘法大師像 乙本	江戸		紙本着色	111.0	77.0		
9	弘法大師像 丙本	江戸		紙本着色	86.3	54.0		
10	弘法大師像 丁本	大正	大正5年(1916)	紙本着色	76.2	38.2		「指山一千百年祈年法會…」複製裏書
11	勝殿毘沙門天像	江戸	19C前	紙本着色	122.3	55.6		金剛所蔵(複製裏書) 六角堂能満院佛本が下綴カ
12	阿字観圖	明治カ	19C	紙本着色	52.6	39.4		「十二天像ほか」の箱 印刷後着色カ
13	不動明王像 丁本	昭和	20C	紙本着色	130.8	60.8		「十二天像ほか」の箱
14	毘沙門天像 丁本	昭和	20C	紙本着色	54.6	24.0		「十二天像ほか」の箱 背景は着色
15	両部種子曼荼羅圖 己本	昭和	20C	紙本版漉着色	34.7	18.2		「十二天像ほか」の箱
16	十一面観音像	江戸	19C前	紙本着色	113.0	49.6		「十二天像ほか」の箱 一部着色
17	弘法大師像 戊本	江戸	19C前	紙版本	102.4	45.0		「十二天像ほか」の箱No.139 六角堂能満院大願并寫 刷裏大成再複製後
18	宝珠曼荼羅圖	江戸	19C前	紙版本	91.5	48.5		
19	十三仏来迎圖(下圖) 丙本	江戸	19C前	紙版本	68.4	24.0		「十二天像ほか」の箱 六角堂能満院の版本
20	不動明王像 戊本(下圖)	江戸	19C前	紙版本	138.6	64.2		
21	不動明王像 己本(下圖)	江戸	19C前	紙版本	139.8	64.2		「十二天像ほか」の箱 142の縮小版
22	1 月天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.7	41.7		
23	2 地天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	122.4	41.5		
24	3 火天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.3	41.5		
25	4 伊勢那天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.5	41.9		
26	5 毘沙門天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.4	41.5		
27	6 日像日天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.4	41.9		「十二天像ほか」の箱 六角堂能満院の版本
28	7 眷釈天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.5	41.8		
29	8 水天像水天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.5	41.6		
30	9 羅刹天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.6	41.6		
31	10 梵天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	122.5	41.3		
32	11 娑摩天像(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.5	41.9		
33	12 風天(下圖)	江戸	19C前	紙版本	121.5	41.6		
34	弁才天像 甲本	江戸	18C初	紙本着色	111.6	50.4		日出藩三代木下利長作 表装裏書「…願成院第十五世 狭橋 桂家院殿安岳宗哲大居士 慶安元年十二月朔日 御誕生 日出藩三代主木下右衛門大矢利長公 寶永四年十二月亡」とあるが、宝永四年は死去した年、享保元年九月死去
35	弁才天像 乙本	江戸	18C初	紙本着色	76.6	35.7		箱107 木下俊長作(日出藩) 旧107号 弁才天像 甲と同じ内容の曼書が表装裏にある 梵書を持つ
36	弁才天曼荼羅圖	江戸		紙本着色	111.6	60.3		願成院に宇賀神を祀せるので天河弁才天カ
37	弁才天十五童子圖	江戸		紙本着色	41.6	27.2		元東博所蔵カ その後河野家所蔵 表装裏書
38	摩訶加羅天曼荼羅圖	江戸		紙本版漉着色	104.1	49.8		田近堂左衛門作 表装裏書 展示不可

表2 観音寺・願成院所蔵仏画リスト2

番号	名称	時代	年代	材質	本紙 縦・横 (cm)	備考
39	1 水天像	江戸	180	絹本着色	91.1 45.3	
40	2 善女龍王像	江戸	180	絹本着色	91.1 45.3	平水書内作 中川久持寄付 箱蓋墨書 同一の本紙
41	3 八大龍王像	江戸	180	絹本着色	91.4 45.1	
42	仏涅槃図 甲本	江戸		紙本顔面着色	155.8 132.0	箱蓋裏「月涅槃 周信筆」箱蓋裏「跡寺院跡院宣 筆家御願遺物 愛宕山常什」
43	仏涅槃図 乙本	江戸	文政6年(1823)	紙本着色	187.5 102.2	大徳院十五世有某作ハ 金剛院或寺本寫 大徳院什物「一、文政六 本年仲春出来 當院十五代阿合有某法印」表裏裏・箱蓋墨書
44	1 金剛界曼荼羅図 甲本	江戸		紙本着色	147.2 131.0	
45	2 胎藏界曼荼羅図 甲本	江戸		紙本着色	147.2 131.0	両部曼荼羅 甲本
46	1 金剛界曼荼羅図 乙本	江戸		紙本顔面着色	84.4 69.7	
47	2 胎藏界曼荼羅図 乙本	江戸		紙本顔面着色	83.3 69.6	両部曼荼羅 乙本
48	一字金輪仏頂(大日金輪)	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	90.4 57.4	高橋氏作 藤紙金定胎藏中尊像 天保5年内高井田寺で寫 「高橋大師一千年遠縁」 箱蓋墨書
49	五大虚空曼荼羅図	江戸		絹本着色	116.6 85.0	旧51号
50	曼荼羅図	江戸	安政3年(1856)	絹本着色	128.1 79.3	中川久敬寄付 十四世祐満 願成院所蔵 箱蓋墨書
51	両部種子曼荼羅図 甲本	江戸	190前	紙本版面	112.4 50.4	「大徳院十八世祐仙律師写」(表裏裏墨書) 乙本と同紙
52	両部種子曼荼羅図 乙本	江戸	弘化3年(1846)	紙本版面	118.0 51.8	「一、弘化三丙午秋書 祐仙筆 大徳院 什物」(表裏裏墨書)
53	両部種子曼荼羅図 丙本	江戸		紙本版面	91.7 41.6	
54	金光明皇勝王経曼荼羅図 甲本	江戸		紙本紙下着色	109.7 41.2	「一、書納主 納田織右衛門 小野賢助」(表裏裏墨書)
55	1 如意輪観音 乙本	江戸	天保5(1834)	紙本顔面着色	60.8 28.0	
56	2 弘法大師像 乙本	江戸	天保5(1834)	紙本顔面着色	60.8 28.0	画中に印「奉弘法大師一千年忌」『真言五図』の篇
57	3 不動明王像 乙本	江戸	天保5(1834)	紙本顔面着色	60.9 28.1	
58	4 両部種子曼荼羅図 丁本	江戸	天保5(1834)	紙本版面	64.0 29.2	「奉弘法大師一千年忌」本紙下縁『真言五図』の篇本紙一枚 上段の金剛界曼荼羅は四印会のみで他は省簡
59	5 理源大師像 乙本	江戸	天保5(1834)	紙本顔面着色	60.6 28.0	「奉弘法大師一千年忌」『真言五図』の篇入
60	釈迦三尊十六善神像	江戸	190前	絹本着色	117.6 60.2	中川久敬寄付「久福公 十四世祐満代」箱蓋 長谷川實一郎の愛宕権理に懸包 No. 60(213)と同じ箱に入る ことと作行が長谷川實一郎に懸包 旧50号
61	黒脚十二神侍像	江戸	190前	絹本着色	94.8 42.6	
62	不動明王像 甲本	江戸	寛政4年(1792)	絹本着色	58.6 32.0	長谷川實一郎(等記)作 No. 44(2066)と同じ箱に入る
63	十三仏来迎図 甲本	近代	190後-200前	紙本紙下着色	76.0 35.8	内縁・外縁間が本紙と同じ紙
64	弥勒菩薩像カ	江戸		絹本着色	72.5 37.8	宝塔を手に持つ
65	兜率天曼荼羅図 甲本	江戸	190前	絹本着色	52.5 50.3	「兜率天曼荼羅図 一幅 十四世祐満代」表裏裏墨書
66	兜率天曼荼羅図 乙本	江戸	文政12年(1829)	絹本着色	121.2 126.6	長谷川實一郎(等記)作「一、愛宕山第十三世有某」箱蓋墨書
67	観音菩薩来迎図	江戸		絹本着色	99.0 39.0	「明治23年弘法大師」の篇に在る。間違ひであろう。
68	五字文殊菩薩像	江戸		絹本着色	96.0 37.6	梵字摩訶印二顆あり
69	如意輪観音像 甲本	江戸	寛政6年(1794)	絹本着色	83.0 33.6	松平近仙作 府内摩尼山福壽院旧蔵 五字文殊菩薩像は箱内がない。「五字文殊菩薩像、如意輪観音像 一幅」箱蓋墨書
70	施摩天像(十二天像)	江戸	寛政5年(1793)	絹本着色	88.2 36.6	府内藩主松平近仙作 府内摩尼山福壽院寄付 箱蓋に墨書
71	准提観音像	江戸	弘化4年(1847)	紙本紙下着色	133.5 64.0	表裏裏「天徳行實具 見十一世代 新口」墨書後墨消 弘化四年秋口、「龍成和画工」天徳、」は墨後大野吉清方助の筆か
72	1 普賢延命菩薩像	明治		紙本着色	63.8 29.4	画工北村氏「箱紙金定南條曼荼羅 普賢延命菩薩 共紙箱」
73	2 樹紙金定南條種子曼荼羅図	明治	明治31年(1896)	紙本着色	64.0 29.6	「明治三十年二月吉祥日 願成院十五世祐龍」箱蓋
74	虚空蔵菩薩像 甲本	江戸	安政6年(1859)	絹本着色	92.2 44.0	森田重三郎墨書作「虚空蔵求願持本尊応護持神」(応願山龍王)「安政第六歳(a)・」本紙が内縁で、他は天津や柱
75	虚空蔵菩薩像 乙本	江戸		紙本着色	90.6 43.2	唐寅作「求願持本尊 願成院」箱蓋墨書 旧90号
76	五大明王図 甲本	室町	150	絹本着色	115.2 58.0	兼廣山京洞寺不動院 九世智海代 表裏裏・箱蓋
77	五大明王図 乙本	江戸		絹本着色	102.6 52.2	長谷川實一(等記)作「五大尊 實一願願信秀書寫」愛宕山什物
78	五大力呪菩薩像 甲本	江戸		絹本着色	117.8 58.0	「五大力明王尊 願成院所蔵」図像には六角巻粉本に近い
79	五大力呪菩薩像 乙本	江戸		絹本着色	104.2 46.6	旧80号
80	不空罽索尊並三王二童子像	明治	明治23年(1890)	紙本着色	91.6 46.4	北村氏作「京都北村氏所蔵」箱蓋墨書

表3 観音寺・顯成院所蔵仏画リスト3

番号	名称	時代	年代	材質	本紙縦・横(cm)	備考	
81	不動明王図 丙本	江戸		絹本着色	45.2 21.2	旧101号	
82	梵天像(十二天像)	江戸	寛政5年(1793)	絹本着色	88.2 36.9	松平近儀作 繪巻に「如意輪観音五字文殊五大力明王」	
83	毘沙門天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.8 37.8	箱蓋 大勝殿12世了斎作 虫食い多 松平近儀作の写し	
84	黒天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	98.0 37.7		
85	地天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.7 37.6		
86	日天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.7 37.8		
87	伊舎那天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.7 38.0		
88	密釈天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.8 37.7		
89	火天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	98.0 37.8		
90	水天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.9 37.8		
91	羅刹天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.6 37.9		
92	月天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.7 37.7		
93	焰摩天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	97.9 37.7		
94	梵天像(十二天像 丙本)	江戸	文化9年(1812)	紙本着色	98.0 37.9		
95	赤不動像	江戸		絹本着色	116.2 43.5		「赤不動尊 宗祖大師 御筆寫 顯成院所蔵」箱蓋裏書
96	不動明王像 庚本(不動明王二童子像)	江戸	19C前中	絹本着画	91.8 37.3		三幅一具「六角堂能満院仏画本私収像傳聚成2004」に収載された2146~2148に類似
97	制多迦童子像(不動明王二童子像)	江戸	19C前中	絹本着画	92.0 37.2		
98	持髻童子像(不動明王二童子像)	江戸	19C前中	絹本着画	91.5 37.2		
99	宝装三尊像	明治	19中後	絹本着色	89.0 33.0	全開帳作「宝装三尊像」顯成院金剛権智道」表装裏書	
100	大元帥明王像 甲本	室町	15C	絹本着色	89.2 37.4	旧4号	
101	大元帥明王像 乙本	江戸	文化10年(1813)19C初	絹本着色	110.4 60.2	長谷川實一(等)作 中川久通・久貴客付はその没年から年代的に間違いか 漢代 文化10年も實一の没年が文化7年のため間違いか 河内高貴寺慈雲祥礼 法願の十三世有賢が伝える。箱書	
102	天弓堂坐明王像 甲本	江戸	18C末(寛政年中)	絹本着色	118.0 70.6	「坐染明王 乙輪 大勝殿什物」天保十四・十六世徳輪代	
103	坐染明王像	江戸	天保14年(1843)	絹本着色	94.4 40.4		
104	天弓堂坐明王像 乙本	江戸		絹本着色	91.3 45.0	旧78号	
105	軍荼利明王像	江戸		紙本着下着色	88.5 29.6		
106	孔雀明王像	江戸		絹本着色	103.7 51.6		
107	高野四社明神像	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	94.7 45.2	長谷川基一良(等)作 中川久敷客付 天保五年三月(薩摩藩書)第一 長谷川氏作(弘法大師像)高祖大師一千年 十四世祐通(箱書)	
108	坐骨権現坐蓮華図 甲本	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	101.4 44.8	長谷川氏作 中川久敷客付 高祖大師一千年 十四世祐通(箱書)	
109	弘法大師像 庚本	江戸	天保5年(1834)	絹本着色	94.6 45.2	長谷川氏作 中川久敷客付 高祖大師一千年 十四世祐通(箱書)	
110	聖天像	江戸	19C中	絹本着色	52.0 21.4	長谷川等身作「自雲舟十三世平安住 長谷川等身繪畫」表装裏書	
111	三寶寛神像	江戸	文久元年(1861)	絹本着色	100.0 41.4	「(供)興濟寺本書・寛之文久元年春二月廿八日・山田重三郎所蔵本を映した六角堂能満院粉本に近い図像	
112	羅刹天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧24号	
113	火天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧21号	
114	梵天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧23号	
115	月天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧22号	
116	密釈天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧25号	
117	地天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧20号	
118	伊舎那天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧19号	
119	焰摩天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧28号	
120	黒天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧27号	
121	水天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧 巻	
122	毘沙門天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧26号	
123	日天像(十二天像 甲本)	江戸	19C前中	絹本着色	94.4 45.4	十二天像 十二幅一具 六角堂能満院粉本に近い図像 旧29号	
124	曹尼図 甲本	江戸		絹本着色	101.1 43.7	台帳106号、左向き巻柄	

表4 観音寺・願成院所蔵仏画リスト4

番号	名称	時代	年代	材質	本紙	縦(㎝)	横(㎝)	備考
125	金光明最勝王経 毘沙門天像	江戸	17C	紙本着色	42.0	21.5	107	有実所持(15代) 袂袖(大勝院18世) 旧93号
126	刀八里沙門天像	江戸		紙本着色	67.5	30.2	107	願成院 旧91号
127	十二天像(日天像)	江戸		紙本着色	95.2	41.1	107	天地の総縁が縁 旧89号
128	光明真言字輪曼荼羅図	江戸		紙本着色	71.7	28.5	107	旧99号
129	一字金輪仏頂(歌迦金輪)	明治		紙本着色	56.0	26.6	107	金剛月窟(明治期の僧)表装と軸が断 旧118号
130	金光明最勝王経曼荼羅図 乙本	江戸		紙本着色	98.1	26.3	107	旧105号
131	密宗血脈相承図	江戸		紙本着色	125.7	47.0	107	旧107号
132	善女龍王像 甲本	江戸	19C前	紙本着色	48.9	27.7	107	水天と墨書 六角堂龍院粉本に類似 旧111号
133	胸帯種子曼荼羅図 戊本	江戸	19C中	紙本版画	78.3	36.5	107	祐蓮作カ (表装裏墨書)
134	十六羅漢像	江戸		紙本着色	28.0	26.7	107	「鳥形儀儀」軸は象牙 (表装裏墨書)
135	普無量三蔵、一行阿闍梨他(八祖像 乙本)	江戸	天保10年(1839)	紙本着色	79.3	37.3	107	八丈祖 本表列箱「二幅内 康福寺現住僧求」表装 裏墨書
136	龍智菩薩、龍猛菩薩他(八祖像 乙本)	江戸	天保10年(1839)	紙本着色	79.3	37.4	107	二幅 天保十己亥年三月二十一 八祖大師(表装裏墨書)
137	龍智菩薩(八祖像 甲本) 8-1	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	91.0	40.1		
138	龍智菩薩(八祖像 甲本) 8-2	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	90.8	40.1		
139	金剛智三蔵(八祖像 甲本) 8-3	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	90.9	40.2		
140	不空三蔵(八祖像 甲本) 8-4	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	91.0	40.2		
141	普無量三蔵(八祖像 甲本) 8-5	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	91.8	40.1		
142	一行阿闍梨(八祖像 甲本) 8-5	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	91.1	40.2		
143	慧聖阿闍梨(八祖像 甲本) 8-7	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	91.1	40.2		
144	弘法大師(八祖像 甲本) 8-8	江戸	文政10年(1813)	紙本着色	90.7	40.1		
145	十二天像 藤風	江戸						左隻
146	十二天像 藤風	江戸						右隻
147	種子真言図	昭和カ		紙本着書	50.1	13.8		軸先は鮮餅巻 本紙4枚の紙を張り合わせ。総縁と本紙が同色の紙
148	文殊菩薩像	明治カ		紙本版画	42.1	27.4		本紙2枚の紙を張り合わせ
149	僧侶図 丙本	近代カ		紙本着色	103.7	37.1		右向/軸先が象牙/青い裏紙/裏紙に印判を使用/162と本紙裏表が同じ
150	僧侶図 丁本	近代カ		紙本着色	84.4	36.8		右向 軸先は象牙 茶色い裏紙62と本紙裏表が同じ
151	風天(十二天 丁本)	江戸		紙本着色	96.6	40.3		総縁が暗灰色 六角堂本に近い まくり状態
152	月天(十二天 戊本)	江戸		紙本着色	95.5	41.0		六角堂龍院粉本の図像に近い。
153	金剛薩埵像カ	江戸		紙本着色	97.9	42.0		宝瓶の上座華座上に金剛窟? 大日と墨書 まくり
154	愛宕権現曼荼羅図	江戸	保暦カ	紙本版下着色	55.3	26.4		飛雲に乗った静尊地蔵が降りてくる図 本紙一疊下に江戸愛宕山大権現(粉本)とある。
155	弘法大師像 辛本	大正	大正7年(1918)	紙本版画	52.3	25.4		船巻・本紙部分が一冊の印刷 本紙裏表「徳島県阿波郡八幡大寺切替・浅野伊勢吉」作と金で印刷
156	五色光明真言曼荼羅図	江戸		紙本版画	53.4	16.6		「百光通照王如来愛宕山口庵所蔵」と表裏裏に墨書
157	權現大師像 丙本	江戸		紙本着色	85.7	41.0		まくり
158	不動明王像 辛本	近代		絹本版画	20.5	13.2		
159	十三仏来迎図 乙本	近代	19C後-20C前	紙本版画	30.5	17.9		天地と柱が本紙と同じ紙で割った版本
160	毘沙門天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.1	36.6		
161	伊弉那天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.2	36.4		
162	普賢天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.1	36.5		
163	風天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.1	36.6		
164	水天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	87.9	36.4		
165	火天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.1	36.5		
166	羅刹天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.1	36.6		
167	焰摩天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	87.9	36.6		
168	梵天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.1	36.7		
169	地天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.0	36.6		
170	日天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.3	36.7		No. 144 写真には156-157が写る。 同じ箱に収納
171	月天像(十二天像 乙本)	江戸	寛政5年(1793)	紙本着色	88.2	36.6		No. 145 写真には156-157が写る。 同じ箱に収納
172	僧侶図 乙本	昭和カ	20C	紙本着色	114.3	37.3		向かって左向き ピンク色の裏紙を着色

横尾貝塚出土の壺形埴輪について

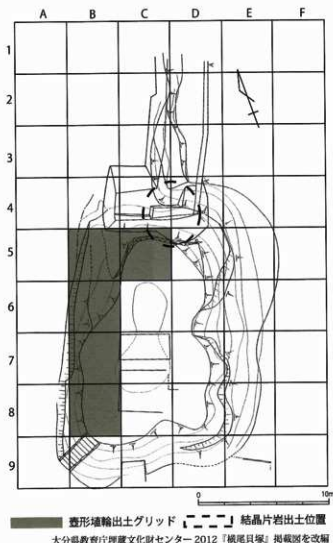
服部 真和

はじめに

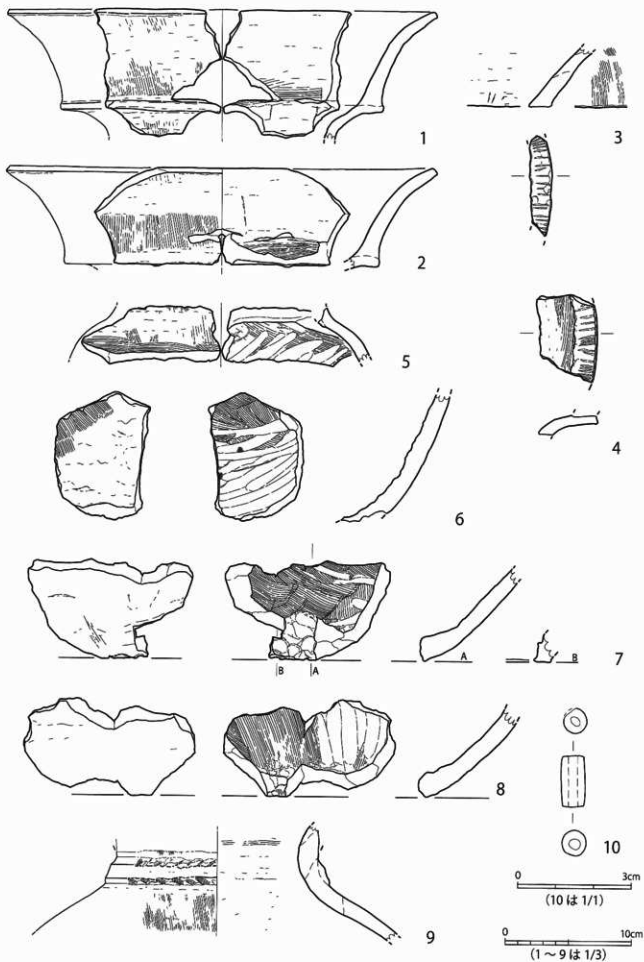
横尾貝塚は大分市横尾に位置する、古くから知られる縄文時代の貝塚である。周辺地域を含め発掘調査が行われているが、こうした調査経緯と成果についてはこれまで刊行された報告書に詳しくまとめられているので割愛する。今回紹介するのは1980（昭和55）年から1981（昭和56）年にかけて大分県教育委員会が実施した県道拡幅工事にともなう発掘調査の際に出土した壺形埴輪で、綿貫俊一氏によりその存在を知らされた未報告の資料である。

壺形埴輪の出土位置

壺形埴輪が出土したのは、貝殻天神が祭られていた横尾貝塚の中心部分にあたる。発掘調査時には「墳丘状」の高まりがあり、その頂部に貝殻天神が祭られていたが、現在ではその高まりは発掘調査により掘り下げられ、貝殻天神も現在の位置へ移動された。この高まりは縄文の貝層や弥生・古墳の包含層の上部に堆積した、礫を多く含む層（Ⅱ層）と表土（Ⅰ層）からなる盛り土である。壺形埴輪はこの盛り土から出土している。



第1図 壺形埴輪出土位置図



第2図 横尾貝塚出土遺物実測図

壺形埴輪について（第2図）

壺形埴輪は部位が特定できる8点を図化した。胴部片と考えられる資料も数点確認できるが、図化はしていない。加えて壺形埴輪以外の未報告資料2点についてもこの場を借りて紹介しておきたい。

1～4は口縁部である。二重口縁の二次口縁は斜め方向に立ち上がり、端部付近から大きく外反する形状で、口径は約34cmである。3・4は剥離面が確認できる資料である。3は二次口縁部、4は一次口縁部で、一次口縁の受部面と二次口縁の接合面には刻みが施される。5は頸部から肩部である。頸部の境で剥離している。外面には横方向のハケ調整、内面にはハケ調整後ナデ調整が施される。頸部の復元径は約17cmである。6は底部付近と考えられる。下部は剥離している。7・8は底部である。底部はあらかじめ開放した状態で製作されており、底部孔の側面には指頭痕が明瞭に残る。底部内面調整はハケ調整が目立つものの、一部には指ナデ調整が確認できる。底部の傾きの判断は難しいが、胴部はやや縦長の球形に近い形状に復元できよう。

以上は、胎土や調整・色調の類似性から同一個体の可能性が高く、横尾貝塚から出土した壺形埴輪は1個体程度と考えられる。胎土は海部地域に特徴的な石英粒が目立って混じるものではないものの、在地の土師器と同じ胎土であることから、在地で製作されたものと考えられる。

9は器種不明の頸部である。頸部には低い突帯がめぐり、上下端部にハケ工具を斜めに押し付ける刻み目が施される。頸部からの立ち上がり部は剥離しているが、外反するものと推測できる。胎土には石英粒が混じる。上記の壺形埴輪とは別個体の壺形埴輪ないしは朝顔形埴輪の頸部の可能性もあり、そうであるならば亀塚古墳などの埴輪に認められる安国寺壺など在地土師器の要素が埴輪に採用された資料と見ることができよう。10は全長1.3cm、径0.6cmの碧玉製管玉である。

まとめ

県下の壺形埴輪は資料の少なさと、埴輪とともに出土した場合には朝顔形埴輪との区別もつきにくいと、壺形埴輪の変遷や時期については不明な点が多いのが現状である。ただ底部焼成前穿孔から開放製作へ、球形胴部から直立ぎみの胴部へ、内面調整はハケ調整からナデ調整へ、などはおおむね時期的な変化としてとらえることができる。こうした状況と、横尾貝塚と同じ大野川下流域に位置する小牧山古墳出土の壺形埴輪とを比較すると、胴部形状は比較的近く、内面ハケ調整や底部孔の側面に指頭痕が明瞭につくなど開放製作の技法もおおむね類似している。しかし小牧山古墳の壺形埴輪の器壁は薄く、調整も丁寧であることから、現時点では横尾貝塚の壺形埴輪は小牧山古墳の壺形埴輪よりも新しい様相と位置付けておきたい。時期としては前期後半から末段階、集成4期あたりであろうか。

横尾貝塚の壺形埴輪が「墳丘状」の高まりから出土したのは先述の通りだが、図化した壺形埴輪や同一個体と考えられる破片資料の注記を見ると、高まりの西側部分（調査時グリッド5・6B、5C、7B、8B）の混雑土層や礫層などから出土している（第1図）。調査所見ではこれらの層には近現代の遺物が混入することから、近代以降の盛り土とされる。埴輪片にはローリングを受けた痕や磨滅も著しくないことから、貝殻天神を高く盛る過程で運ばれてきた土に混入していた可能性が高いと考える。盛り土がどこから運ばれてきたのが問題となるが、その有力な候補として横尾貝塚西側段丘上があげられる。貝塚西側は中世から開削などの土地改変が行われてきたことが大分市教育委員会の調査により確認されている。段丘上には2基の墳丘が現存する有田古墳群があるが、横尾地区には七塚の伝承があり、現在では墳丘が削平された古墳の存在も指摘されている。横尾貝塚の調査時、見学に訪れた綿貫氏は「墳丘状」の高まりの北側斜面あたりで大量の割られた結晶片岩が層となってあったことを記憶している。図面や写真などでその状況は確認できないものの、こうした結晶片岩は破壊された古墳から出土した石棺材の残骸であった可能性は十分考えられる。

横尾貝塚の壺形埴輪は帰属先が明確ではないものの横尾貝塚周辺で用いられたと考えるもので、大野川下流域に展開した壺形埴輪の貴重な資料と評価できる。今後とも、こうした未報告資料の紹介を行い、検討資料の増加に努めたい。

資料化にあたり下記の皆様にご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

井大樹 神田高士 塩地潤一 高橋信武 田中裕介 仲和彦 諸岡郁 綿貫俊一

主要参考文献

池邊千太郎 1995 「大分市松岡所在の小牧山古墳群について」『おおいた考古 第7集』大分県考古学会

大分県教育委員会 1982 『横尾貝塚発掘調査概報』県南鶴崎一大南線改良工事に伴う発掘調査の概要

大分県教育庁埋蔵文化財センター 2012 『横尾貝塚』大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 58 集

大分市教育委員会 2008 『横尾貝塚』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 83 集

大分市教育委員会 2016 『横尾遺跡 10』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 140 集



横尾貝塚の「墳丘状」の高まり(南より)



横尾貝塚の「墳丘状」の高まり(東より) 矢印部分

大分県立埋蔵文化財センター年報（平成30年度）

第1章 平成30年度 大分県立埋蔵文化財センターの事業実績

I 埋蔵文化財保護行政の中核的役割を担う

1 発掘調査の推進

県事業関係の発掘調査は、臼杵城下町跡、志手町遺跡、小野古墳、府内城・城下町の4件の本調査を行ったが、例年実施していた国土交通省等の受託事業については本調査はなかった。また、分布調査は県土木建築部事業で546件、県農林水産部事業関係で216件であった。試掘・確認調査は、防衛省・法務省関係事業等で65件実施した。

(1) 本調査（4件）

第1表 県事業関係本調査箇所

事業主	事業名	遺跡名等	所在地	調査期間	調査面積	調査担当	主な時代	主な遺構・遺物
1 臼杵土木事務所	都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業	臼杵城下町跡(第3次)	臼杵市	4月16日～5月8日	267㎡	宮内克己	中世・近世	土坑 陶磁器、瓦等
2 臼杵土木事務所	国道217号道路改良事業	志手町遺跡	津久見市	4月16日～5月21日	916㎡	横澤 慈	中世	掘立柱建物、土坑墓 土師器、陶磁器
3 大分土木事務所	大分港坂ノ市地区統合補助事業	小野古墳	大分市	5月29日～7月25日	523㎡	綿貫俊一	古墳	古墳 土師器、勾玉、管玉
4 県有財産経営室	大分港坂ノ市地区統合補助事業	府内城・城下町	大分市	10月29日～11月20日	537㎡	土谷崇夫	近世・近代	土坑、堀 陶磁器、瓦等

第2表 受託事業関係本調査箇所

事業名
本調査なし

(2) 分布・試掘・確認調査（827件）

第3表 分布・試掘・確認調査件数

	区分	調査件数	期間	調査担当	備考
1	県土木建築部事業分布調査	546	4月～平成31年3月	横澤・土谷他	
2	県土木建築部他事業試掘・確認調査	58	4月～平成31年3月	横澤・土谷他	要本調査1件
3	県農林水産部事業分布調査	216	4月～平成31年3月	横澤・土谷他	
4	玖珠駐屯地旧埋設給水管撤去工事立会	1	4月16日・5月1日	服部真和	
5	豊後高田簡易裁判所仮庁舎新営工事立会	1	8月23日	綿貫俊一	
6	佐伯税務署建築工事試掘	1	9月20・21日	綿貫俊一	
7	大分地方気象台視程計整備工事立会	1	9月23日	服部真和	
8	賀来桑里跡確認	1	9月24日	綿貫俊一	
9	九州大学別府病院再開発（仮称）試掘	1	2月13日	綿貫俊一	
10	三光本耶馬溪道路試掘（本耶馬溪町折元）	1	3月18日	服部真和	

(3) 整理・報告書等

発掘作業に係る遺物の整理作業を継続して行い、その調査報告書として『府内城三ノ丸遺跡Ⅳ』、『蔦山万寿寺跡』、『五ヶ瀬中遺跡』、『府内城・城下町』の県事業関係4冊、『四日市遺跡2』の土地開発公社関係1冊、『古戸遺跡』の国土交通省関係1冊の計6冊及び『調査概報』、『研究紀要』を刊行した。

第4表 平成30年度に刊行した印刷物

報告書番号	遺跡名等	副題等	担当者	総頁数
1	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第5集	府内城三ノ丸遺跡Ⅳ	大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	小林昭彦 A4版 72頁
2	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集	蔦山万寿寺跡	都市計画道路庄の原佐野線(元町工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	吉田 寛 横澤 慈 A4版 1200頁 (3分冊)
3	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第7集	五ヶ瀬中遺跡	県道庄内久住線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	土谷崇夫 A4版 50頁
4	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集	府内城・城下町	知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	土谷崇夫 A4版 30頁
5	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集	四日市遺跡2	玖珠工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	江田 豊 小林昭彦 後藤一重 A4版 350頁
6	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集	古戸遺跡	国道212号三光本耶馬溪道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	井 大樹 A4版 300頁
7	大分県内遺跡発掘調査概報 22			横澤慈 A4版 30頁
8	大分県立埋蔵文化財センター研究紀要第2集			A4版 72頁

(4) 市町村指導

発掘調査の技術指導として、市町村担当者を対象とした研修会を実施した。

① 市町村文化財保護行政担当職員を対象とした研修

第5表 市町村担当者対象研修

研修	期日	担当	内容
1 市町村担当者埋蔵文化財研修「写真撮影」	11月30日	友岡信彦	報告書用遺物写真の撮影方法

(5) 所蔵資料の活用

県立埋蔵文化財センターとして、新規オープンした昨年度同様、約30件の資料・写真貸出、資料調査の対応を行った。

① 所蔵資料の貸出し

第6表 所蔵資料貸出し

貸出機関	期間	内容
1 大分県立博物館	4月1日～3月31日	庄の原遺跡ナイフ形石器2点ほか 常設展示
2 株式会社ジャパン通信情報センター	4月17日	四日市遺跡現地説明会写真 『文化財発掘出土情報』2018年6～7月号「各地の動向」掲載
3 大分市教育委員会	5月22日	考古学ライブラリー『豊後府内を語る』掲載図版写真4点 「FUNAI」ジュニア検定」公式テキスト(仮称)に使用

第7表 所蔵資料貸出2

貸出機関	期間	内容
4 宮崎県立西都原考古博物館	5月14日	四日市遺跡線刻絵画土器器面ほか3点 特別展「共に生きたもの〜ムシと動物の考古学〜」図録等 で使用
5 株式会社ニューサイエンス社	5月31日	四日市遺跡線刻絵画写真ほか3点 『考古学ジャーナル』2018年6月臨時増刊号掲載
6 宮崎県立西都原考古博物館	6月19日～9月30日	四日市遺跡線刻絵画土器ほか6点 特別展「共に生きたもの〜ムシと動物の考古学〜」に出展
7 株式会社雄山閣	6月27日	中世大友府内町跡動物遺存体写真 『季刊考古学』144号掲載
8 大分市教育委員会	7月17日	四日市遺跡木棺墓出土品写真 『大分市の教育』（平成30年度）掲載
9 中津市歴史民俗資料館	7月26日	上ノ原横穴墓群写真データ15点 中津市歴史博物館（仮称）常設展パネル利用
10 大分市教育委員会	9月3日	旧万寿寺跡出土鬼瓦写真 「FUNAI ジュニア検定」公式テキスト掲載
11 大分市歴史資料館	9月7日～12月9日	府内城三の丸北口出土鬼瓦2点ほか 特別展『日本100名城〜大分府内城』出展
12 築上町教育委員会	9月12日	伊藤田田中遺跡2次調査空中写真ほか3点 国史跡船迫築跡公園体験学習館企画展「鉄の歴史展」写 真パネル等に掲載
13 築上町教育委員会	10月3日～12月21日	伊藤田田中遺跡出土遺物4点 国史跡船迫築跡公園体験学習館企画展「鉄の歴史展」に 出展
14 杵築市教育委員会	10月11日～19日	安岐城跡出土土瓦1点・府内城跡出土土瓦1点 杵築城発掘調査現地説明会関連展示で使用
15 大分市教育委員会	10月20日	考古学ライブショー『豊後府内を掘る』掲載図版写真12点 『中世大友再発見フォーラムⅢ』資料集に使用
16 津久見市教育委員会	10月30日～11月28日	門前遺跡出土遺物9点 市民図書館「津久見市の文化財〜守り語り継ごう地域のた から〜」展出展
17 個人	10月30日	「唐枕」（中世大友府内町跡）写真 新聞記事掲載
18 個人	11月1日～3月30日	中世大友府内町跡第11次調査金箔京都系土師器写真 新聞記事掲載
19 個人	11月6日～3月31日	長湯横穴群7号墓出土品・長湯横穴群遠景写真 『竹田市の指定文化財』（改訂版／平成31年度発行予定）
20 栃木県那珂川町可なす風土記の 丘資料館	11月21日～2月15日	下郡桑苗遺跡出土ブタ頭骨1点（写真） 特別陳列えと展「亥を考古学する」パネル展示
21 大分県立歴史博物館	2月8日～3月10日	上ノ原横穴墓群玉類ほか れきはく交流展「いろいろの考古学〜人々が魅せられた色〜」 （国東市歴史体験学習館）出展

② 所蔵資料の利用

第8表 所蔵資料利用1

利用者	期間	内容
1 宮崎県立西都原考古博物館職員	4月～3月	ブタ頭蓋骨1点ほか 特別展のための資料調査（計測・観察・写真撮影）
2 大学研究者	5月2日	中世大友府内町跡出土遺物 調査研究の事前調査
3 大分市歴史資料館職員	6月4日	府内城三之丸跡出土鬼瓦2点ほか 特別展資料調査

第9表 所蔵資料利用2

	利用者	期間	内容
4	考古学専攻学生	6月21日～23日	尾畑遺跡扁平打製石器 卒業論文作成
5	個人	7月2日～4日	縄文晩期土器 432点 縄文土器研究のため
6	考古学専攻大学院生	7月15日	船助野地遺跡出土遺物 論文執筆（熟覧・写真撮影・実測）
7	大分市教育委員会職員	8月16日	センター所蔵品 14件（中世大友府内町跡ほか）写真撮影 動画「よみがえる豊後府内の世界」（南蛮 BVNGO 交流館 グラフィックシアターで上映）で使用
8	個人	11月16日	四中世大友府内町跡出土遺物陶磁器3点 陶磁器研究のため（熟覧・写真撮影・実測）
9	個人	12月12日	大分県下出土照明具等（熟覧） 「古代の灯火」に関する研究のため（熟覧）

II わかりやすい展示、楽しく学べる歴史体験

(1) 常設展示

① 豊の国考古館

大分県内で出土した発掘資料を基に旧石器時代から近世にいたる展示をすることで、大分県の通史を学ぶ。

② BVNGO大友資料館

中世大友府内町跡出土品を中心とした豊富な発掘資料の展示をすることで、戦国大名大友氏について学ぶ。



(2) 企画展示

春先の『豊と日向』から3月の『古鏡の輝き』まで、年間5回の企画展を開催した。

① 企画展1

『豊と日向～日出国の考古学～』

平成30年4月1日（土）～5月20日（日）

開催期日 57日

入館者数 1,658名

東九州という枠組みでくられる豊（大分県）と日向（宮崎県）

は互いに影響を受けながらも異なる文化を形成していた。

そこで各時代の両県の特徴を紹介し歴史における共通点や相違点を明らかにする展示を行った。

（主な展示品）

西都原170号墳出土埴輪輪船（複製）

島内3号地下式横穴墓出土短甲

ヴェロニカのメダイ、コンタツ

土製聖人像

青磁小壺、龍首水注 など



② 企画展 2

「子ども博物館～見て触って確かめてみよう～」

平成30年6月19日（火）～9月2日（日）

開催期日 54日

入館者数 3,386名

主に夏休み期間中児童生徒向けの展示を行った。道具の今昔、大小、色の違いなど遺物を様々な角度から比較した。

「見る」展示だけではなく、「触って」、「確かめる」展示コーナーを設け、答えを探しながら理解を深めていく展示。

（関連イベント）

「本物の勾玉にさわってみよう」

7月28日～8月15日、歴史体験学習館で実施した。



③ 企画展 3

『大友氏の栄華Ⅱ～豊後府内に花開く雅の世界～』

平成30年9月29日（土）～11月25日（日）

開催期日 51日

入館者数 4,377名

中世府内町から出土した茶道や香道の道具など大友宗麟に関する茶の湯の資料を紹介し、豊後府内に花開いた雅な世界を紹介した。

（展示テーマ）

京の雅 ～都の茶の湯と「瀬戸物屋」～

利休が生んだ「市（まち）」～堺～

大友宗麟の茶の湯 ～宗麟と利休～

豊後府内 ～「市（まち）」に住む人々の雅～

（関連イベント）

「呈茶」

茶道裏千家淡交会大分県立大分商業高校茶道部

10月13日（土）

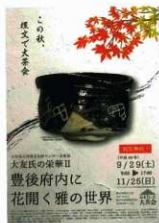
10席が、どの席も満席となる盛況であり、参加した方々は、お茶を点てる高校生の凛とした姿に感心しながらお茶を楽しんでいた。

「子ども向け講座 お茶を学ぶ」

茶道裏千家淡交会大分県立大分商業高校茶道部

11月24日（土）

薄茶と菓子をいただきながら、茶道の作法やお茶の歴史を学ぶ講座を実施した。



④ 企画展 4

『大分の考古学史～おおいたを掘る～』

平成30年12月18日（火）～平成31年2月24日（日）

開催期日 74日

入館者数 2,266名

大分県内における考古学上の重要な発見資料を通して、調査と発見の歴史をたどる。

（展示テーマ）

近代学問以前 近代考古学の導入

大学等による調査 行政による発掘調査の進展



⑤ 企画展 5

『古鏡の輝き～いにしへの大分を映す～』

平成31年3月12日（火）～令和元年5月12日（日）

開催期日 5日（3月31日まで）

入館者数 696名

様々な祭祀の場で用いられた弥生時代の銅鏡、古墳時代の墓に被葬者と共に葬られた銅鏡など神秘的力を宿し権威の象徴として用いられたさまざまな鏡の歴史を出土品や歴史資料などから歴史を学ぶ。

（展示テーマ）

弥生時代 ～鏡の登場～ ～中国独特の宇宙観～

古墳時代 ～権威の象徴 三角縁神獣鏡～

古代・中世 ～和鏡の登場～ ～和鏡に影響を与えた湖州鏡～

江戸時代 ～近礼調度品とみだしなみ～



(3) ミニ企画展示

企画展と併行しながら年間3回、ミニ企画展を開催した。

① ミニ企画展 1

「中世城館の考古学」

平成30年3月27日（火）～5月20日（日）

鎌倉時代から安土桃山時代にかけて武家が台頭し、その居住のための館と戦いに備えた城が整備された。大分県でも569箇所の中世城館を確認している。展示では文献や絵図なども交えて大分の中世城館の実像に迫った。

（展示テーマ）

大分の中世城館の実像にせまる

土から石の城へ ～織豊期の城～

後世に伝えられた中世城館



② ミニ企画展 2

「大分の縄文土器」

平成30年5月22日（火）～9月2日（日）

大分県内出土の代表的な縄文土器から、縄文土器の時期ごとの変遷を紹介するとともに、縄文人のデザイン性や造形美に迫り、縄文時代についての理解を深める。

（主な展示資料）

草創期 二日市洞穴出土土器 森の木遺跡出土土器

早期 黒岩遺跡出土土器 エゴノクチ遺跡出土土器

前期 羽田遺跡出土土器

中期 横尾貝塚出土土器

後期 下原遺跡出土土器 飯田二反田遺跡出土土器

晩期 大石遺跡出土土器 玉沢地区条里跡出土土器 ほか



③ ミニ企画展 3

「話題の資料展」

平成30年12月15日（土）～平成31年3月31日（日）

昨年度を中心に県及び県内各市町が実施した発掘調査で出土した考古資料の中で、地域の歴史研究上注目された成果が確認された資料や新たに文化財指定された資料などの展示を行う。

（主な展示資料）

- 四日市遺跡出土線刻絵画土器
- 法壇遺跡出土人面形土製品
- 定留鬼塚古墳出土革袋形瓶 など



(4) 歴史体験学習

歴史体験をとおして古代人の知恵を知り、生きる力をはぐむための体験学習を、毎日実施している。子どもたちは古代人になりきって、勾玉や土器作り、火おこし、組紐作りなどを学習している。

開館2年目の今年は約2,200人が体験をとおして歴史を楽しく学んだ。



第10表 歴史体験学習一覧

期日	研修内容	会場	参加者
1	勾玉製作 加工しやすい石（ろう石）を用いて、金やすりや紙やすりなどを使い、勾玉を製作する。		392名
2	犬形土製品製作 乾燥しやすいニロ粘土を用いて、中世大友府内町跡の発掘調査で出土する犬形土製品を製作する。		116名
3	ミニ瓦製作 「瓦の製作工程を学ぶため、瓦の模様を入れた型に特殊な粘土を押し込み、ミニ瓦を製作する。		29名
4	古代機織り体験 簡易型の機織り機と毛糸を用いて、コースターや小形マットを製作する。		230名
5	組紐体験 刺繍糸3本もしくは5本を使い、自らの指先の動きで糸を組み上げ紐を製作する。		397名
6	火おこし体験 簡易な火おこし機（舞きり技法）を使い、藁に火をつける体験をする。		169名
7	铸造体験 貨幣や巴型銅器、銅鐸などの鋳型に、低温度で溶ける金属を流し込み、製品を作る铸造体験を行う。		75名
8	土器制作 陶芸用粘土を用いて、小形の縄文土器や弥生土器を製作し、乾燥後体験学習館に設置している電気窯で焼き上げる。		333名

勾玉作り 60分 300円

加工しやすい石（ろう石）を用いて、金やすりや紙やすりなどを使い、勾玉を作ります



犬形土製品作り 30分 100円

粘土を用いて、中世大友府内町跡の発掘調査で出土する犬形土製品を作ります



Ⅲ 教育普及の充実

(1) 講演会・講座

講師に京都国立博物館工芸室研究員の降矢哲男氏や国立歴史民族博物館名誉教授の小野正敏氏をむかえて開催した「豊後府内と茶の湯Ⅰ・Ⅱ」をはじめ4回の埋文講演会を行った。そのほか考古学講座を7回、児童・生徒を対象とした特別講座を2回開催した。

① 埋文講演会 1

「世界史の中での豊後古墳文化」

平成30年9月16日(日)

埋蔵文化財センター(第2講座室) 参加者100名

講師に明治大学文学部教授の佐々木憲一氏をむかえて、世界的視点から日本の古墳文化、さらに大分の古墳文化について講演をいただいた。



② 埋文講演会 2

「豊後府内と茶の湯Ⅰ」

平成30年10月21日(日)

大分市民公園能楽堂 参加者131名

企画展「大友氏の栄華Ⅱ～豊後府内に花開く雅の世界～」に関連し、京都国立博物館工芸室研究員の降矢哲男氏を講師に迎え、「茶の湯の歴史と大友宗麟の茶道具」の講演をいただいた。

関連行事「箏曲の演奏会」

大分上野丘高等学校邦楽部による琴の演奏会

講演会に先立ち、古曲「六段の調べ」、「ジブリ映画音楽メロディ」等の演奏を行った。



③ 埋文講演会 3

「豊後府内と茶の湯Ⅱ」

平成30年11月17日(土)

大分市民公園能楽堂 参加者102名

埋文講演会2と同様に、「大友氏の栄華Ⅱ～豊後府内に花開く雅の世界～」に関連し、国立歴史民族博物館名誉教授の小野正敏氏を講師に迎え、「大友館と戦国期武家館、発掘された茶の湯の場」の講演をいただいた。

④ 埋文講演会 4

「おおいたを掘る」

平成31年2月17日(日)

埋蔵文化財センター(第2講座室) 参加者100名

長年にわたり大分県の埋蔵文化財行政をけん引した元大分県立歴史博物館長の渋谷忠章氏を講師にむかえ、公共や民間事業に伴う発掘調査、史跡の確認や整備に伴う発掘調査等についての講演をいただいた。



(2) 考古学講座

埋文センター職員等が講師を務める講座を毎月実施し、約50名の方が聴講した。埋文講演会がある月は、それを考古学講座に代えて実施した。

第11表 考古学講座一覧

	期 日	演 題	講 師	会 場	参加者
1	4月28日(日)	「古墳時代の豊と日向」	東憲章 宮崎県立西都原考古博物館	埋文センター 第2講座室	66名
2	5月16日(水)	「戦国から江戸初期の真鍮製品」	後藤晃一 大分県立歴史博物館	埋文センター 第2講座室	33名
3	6月20日(水)	「大分の縄文土器」	横澤悠(調査第一課)	埋文センター 第2講座室	53名
4	7月18日(水)	「埋文センターの舞台裏」	友岡信彦(参事兼調査第一課)	埋文センター 第2講座室	53名
5	8月22日(水)	「四日市遺跡をさぐる」	服部真和(調査第二課)	埋文センター 第2講座室	50名
6	12月19日(水)	「話題の資料展を語る」	井 大樹(調査第二課)	埋文センター 第2講座室	46名
7	1月16日(水)	「大分の考古学史」	宮内克己(調査第一課)	埋文センター 第2講座室	53名

(3) 特別講座

児童・生徒を対象としたジュニア考古学講座で、考古資料に直接触れながら考古学について学ぶことで、考古学や郷土の歴史に興味を持ってもらうことを目的に年2回開催している。



① 特別講座 1

「土器作り体験」

平成30年8月5日(日)

第1講座室・豊の国考古館ほか 参加者42名

土器の歴史や製作方法について学習をした後に、実際に出土した弥生土器を間近で観察しながら、野焼き粘土で弥生時代の下城式土器甕の作製にチャレンジした。

② 特別講座 2

「鑄造体験」

平成31年2月3日(日)

第2講座室・歴史体験学習館ほか

参加者38名

古代の寺院やそこに貼られていた埴仏について、実際に出土した遺物を間近で観察しながら勉強した。

そして、シリコン型に溶かしたチョコレートを流し込み、虚空蔵寺出土のせん仏をモチーフにしたチョコを作製した。



(4) ボランティア養成講座

埋蔵文化財センターの移転拡充にとともない、応募をはじめたボランティアの養成も4年目をむかえ、修了した19名ほどの方が図書整理や歴史体験指導等に活躍いただいている。今年も9回の養成講座を実施し、4名が修了生として運営にご協力いただくこととなった。

第12表 ボランティア養成講座一覧

	期日	研修内容	会場	参加者
1	6月20日(水)	「ボランティア活動について」「縄文ポシェット製作」 「考古学講座受講」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	8名
2	7月18日(水)	「考古学講座受講」「ミニ瓦製作」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	6名
3	8月22日(水)	「考古学講座受講」「土器製作」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	5名
4	9月16日(日)	「埋文講演会受講」	県立図書館視聴覚ホール	6名
5	10月21日(日)	「埋文講演会受講」	県立図書館視聴覚ホール	4名
6	11月17日(土)	「埋文講演会受講」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	3名
7	12月19日(水)	「考古学講座受講」「緊急時対応」	埋文センター 第2講座室	6名
8	1月16日(水)	「考古学講座受講」「鋳造体験」	埋文センター 第2講座室・歴史体験学習館	9名
9	2月6日(水)	「修了式」	埋文センター 第1講座室	3名

IV 連携の強化(学校・地域等)

(1) 学校との連携

小中学校の社会科学見学や修学旅行、大学の授業で当センターを多く活用いただいた。また、中学校の職場体験や大学生のインターンシップ等将来の進路に関する生徒・学生の受入れも行った。

① 職場体験・インターンシップ受入れ

職場体験として大分市内中学校9校、県立高等学校の生徒1名の受入れを行った。また、県庁でのインターンシップの一環で、当センターでも2名の大学生の研修を実施した。

第13表 職場体験・インターンシップ受入れ一覧1

項目	期日	学校名等	参加者
1 職場体験	6月19日～20日	大分市立城東中学校	6名
2 職場体験	7月3日～5日	大分県立大分豊府中学校	4名
3 職場体験	7月4日～5日	大分市立明野中学校	4名
4 職場体験	7月4日～5日	大分市立滝尾中学校	6名
5 職場体験	9月5日～6日	大分市立城南中学校	4名
6 職場体験	9月11日～12日	大分市立原川中学校	4名
7 職場体験	9月11日～12日	大分市立滝尾中学校	4名
8 職場体験	9月12日～13日	大分市立大東中学校	4名

第14表 職場体験・インターンシップ受入れ一覧 2

項目	期日	学校名等	参加者
9 職場体験	11月6日	大分市立植田東中学校はばたき分校	4名
10 職場体験	8月2日	大分県立別府翔青高等学校	1名
11 インターンシップ	8月21日～24日	鳥取大学	1名
12 インターンシップ	8月21日～24日	大分県立芸術文化短期大学	1名

② 授業・社会科見学・修学旅行等の受入れ

2大学が授業の中で当センターを活用した。また、小学校及び大学の出前授業に職員を派遣した。そのほか9校の小中学校が社会科見学で展示見学や歴史体験を行った。また、佐伯の中学校が関西方面への修学旅行の帰りに見学で立ち寄った。

第15表 授業・社会科見学・修学旅行等受入れ一覧

項目	期日	学校名等	参加者
1 授業	4月19日	別府大学史学科	7名
2 授業	5月18日	別府大学史学科	21名
3 授業	9月12日	福岡大学歴史学科	86名
4 授業	12月16日	別府大学史学科	28名
5 出前授業	6月8日	大分市立小佐井小学校6年	70名
6 出前授業	7月3日	別府大学キャリア教育講座	120名
7 出前授業	8月21日	宇佐市立和間小学校6年	14名
8 出前授業	11月3日	大分市立舞鶴小学校6年	47名
9 遠足	4月27日	岩田高等学校1年	105名
10 社会科見学	4月18日	大分市立津留小学校5・6年	51名
11 社会科見学	6月11日	大分市立大道小学校6年	66名
12 社会科見学	6月14日	津久見市立聖徳小学校6年	12名
13 社会科見学	9月27日	大分市立森岡小学校5年	38名
14 社会科見学	10月31日	別府市立大平山小学校6年	57名
15 社会科見学	11月9日	大分市立春日町小学校6年	106名
16 社会科見学	11月10日	津久見市立千怒小学校5・6年	64名
17 社会科見学	12月14日	佐伯市立かまえ翔南学園6年	44名
18 社会科見学	12月4日	豊後大野市立千歳中学校2年	20名
19 修学旅行	9月14日	佐伯市立佐伯鶴谷中学校2年	190名

③ その他教育関係団体等の受入れ

小・中学校教員の団体が見学・歴史体験で活用していただいた。そのほか県教育センターの実施する教員新採用研修や社会教育課の支援者研修会、高校教育課のふるさと「しごと」フォーラム等の講師を務めた。

第16表 その他教育団体等の受入れ一覧 1

項目	期日	学校名等	参加者
1 学校関係団体	4月25日	大分県高等学校文化連盟美	65名
2 学校関係団体	4月26日	大分市立大道小学校教員	3名

第17表 その他教育団体等の受入れ一覧2

項目	期日	学校名等	参加者
3 学校関係団体	5月10日	大分市小学校社会科部会	70名
4 学校関係団体	5月26日	大分県高等学校文化連盟美術部会	369名
5 学校関係団体	7月30日	大分市立津留小学校新着教員研修	4名
6 学校関係団体	8月7日	大分県高等学校文化連盟美術部会	10名
7 学校関係団体	8月9日	大分市立津留小学校PTA	11名
8 学校関係団体	8月31日	大分市中教研社会科部会	21名
9 学校関係団体	10月13日	大分県立大分商業高等学校茶道部呈茶	11名
10 学校関係団体	10月21日	大分県立大分上野丘高等学校邦楽部演奏	20名
11 学校関係団体	10月26日	大分県高校養護部会大分東部	7名
12 学校関係団体	11月21日	大分県高校教育研究部地歴公民部会	13名
13 学校関係団体	11月24日	大分県立大分商業高等学校茶道部呈茶	8名
14 学校関係団体	11月28日	大分県高等学校文化連盟美術部会	5名
15 教員研修	7月26日	小学校・特別支援2経年教員対象の研修	12名
16 ふるさと「しごと」フォーラム	12月26日	高校生を対象とした「おおいたを創るキャリア教育推進事業」	14名
17 歴史学習体験キット	4月～3月	埋蔵文化財センター所蔵資料から各時代の特徴的な遺物を選出し、学校教育で利用できる学習キットを作成のうえ、貸出しを行う。	

(2) 地域との連携

文化財保護団体や社会教育団体等の展示見学、歴史体験等の申込みが30団体ほどあり、その受入れを行った。また社会教育団体等から研修会での講師の要請があり、職員を派遣した。

① 各種団体の展示見学・歴史体験等での受入れ

展示見学の申込みが30団体ほどあり、そのうちボーイスカウトや文化財愛護少年団、婦人学級等17団体が歴史体験学習館で体験メニューを行っている。

第18表 各種団体受入れ一覧1

項目	期日	学校名等	参加者
1 見学・歴史体験	4月7日	ジョバンニの会	40名
2 見学・歴史体験	4月14日	天心童こども園	8名
3 見学・歴史体験	4月21日	ジョバンニの会	13名
4 見学	4月23日	九重町教育委員会	11名
5 見学	4月24日	ぶんご知新の会	20名
6 見学・会議	4月28日	九州前方後円墳研究会	4名
7 見学	5月2日	直入史談会	10名
8 見学	5月11日	大分県文化財関係団体	71名

第19表 各種団体受入れ一覧2

項目	期日	学校名等	参加者
9 見学	6月21日	柳佐伯印刷の研修	3名
10 見学	7月2日	大分市生活学校推進運動連絡協議会	32名
11 見学・歴史体験	7月21日	宇佐市教育委員会	29名
12 見学	7月27日	大分県市町村文化財担当者・文化財保護調査委員会	40名
13 歴史体験	7月27日	こどもディサービス青い鳥	9名
14 見学・会議	7月29日	大分県地方史研究会	40名
15 見学・歴史体験	8月1日	国東市文化財愛護少年団	13名
16 見学	8月22日	大分県文化財愛護少年団総会	12名
17 見学・会議	9月7日	レッドデータブックカテゴリー検討会	14名
18 見学	10月3日	杵築市ボランティアガイド	14名
19 見学	11月2日	北杵築公民館高齢者学級	37名
20 見学・歴史体験	11月2日	滝尾公民館アイビー学級	12名
21 見学	11月2日	人吉市教育委員会	8名
22 見学・歴史体験	11月2日	大分市内ホスピタル	10名
23 見学	11月13日	杵築歴史教室	50名
24 見学	11月16日	監査事務局	2名
25 見学	11月27日	杵築市猪尾老人クラブ	13名
26 見学・歴史体験	11月28日	大分県児童相談所	27名
27 見学・会議	11月30日	公共工事従事者研修会	40名
28 見学・講座	12月9日	近世石垣研究会	60名
29 見学	12月19日	国東市文化財審議委員	15名
30 見学・歴史体験	12月26日	放課後ディサービスグローリー	26名
31 見学・会議	1月12日	大分前方後円墳研究会	5名
32 見学	1月18日	国東市武蔵中央公民館	18名
33 見学・歴史体験	2月10日	かかびファミリークラブサテライト	32名
34 見学・講義	2月22日	文化課・奈良文化財研究所	43名
35 見学・研修	2月27日	文化課・大分県市町村教委	40名
36 見学	3月19日	きつき郷土史研究会	13名
37 見学	3月21日	大在地区団体	17名
38 見学・会議	3月26日	標本資料検討委員会	10名

② 研修会等への講師派遣

各市町村にある歴史団体・公民館等の依頼を受けての歴史に関する講演や地域の子どもたちを対象に火おこしや勾玉作り等の歴史体験メニューを実施した。

第20表 研修会・講師派遣等一覧

項目	期日	学校名等	会場	参加者
1 大分海と日本プロジェクト	8月23日	小学校高学年を対象とした中世大友氏府内町跡出土の海に関する遺物の説明 (TOSテレビ大分主催)	埋蔵文化財センター	20名
2 別府の歴史について	6月7日	別府史談会主催の歴史講座	別府市中央公民館	30名
3 大分の古代寺院と瓦	6月9日	古代史の会主催の歴史講座	コンパルホール視聴覚室	30名
4 大分の古墳について	8月5日	坂ノ市歴史会主催の歴史講座	大分市海部古墳資料館	30名
5 歴史体験	7月28日	大分市東部公民館主催の講座	大分市東部公民館	27名
6 歴史体験	10月14日	九重青少年の家主催の講座	九重青少年の家	30名
7 大分の考古学について	11月7日～11月10日	シルバー人材センター主催の歴史講座	大分市	25名
8 壇輪について	12月12日	古代史の会主催の歴史講座	コンパルホール視聴覚室	30名
9 大分の考古学について	12月12日～12月15日	シルバー人材センター主催の歴史講座	別府市	25名
10 四日市遺跡について	2月17日	くすまち公民館フェスティバル公開講座	くすまちメルサンホール視聴覚室	90名



ゴールデンウィークの催し物



考古学マスターのパスポート



高文連スケッチ大会



「呈茶」大分商業高校茶道部



子供向け講座「お茶を学ぶ」



埋文講演会のギャラリートーク



本物の勾玉をさわってみよう



高文連スケッチ大会推奨展示会



ジュニア考古学講座「土器作り」



埋文キャラクター名称決定



高校生による呈茶



高校生による箏曲の演奏

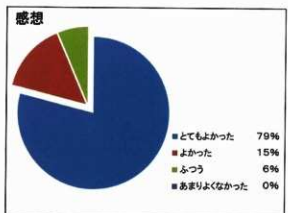
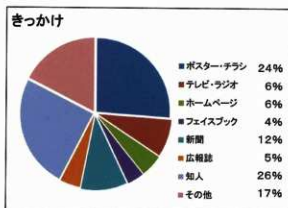
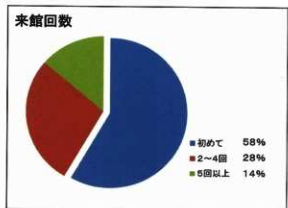
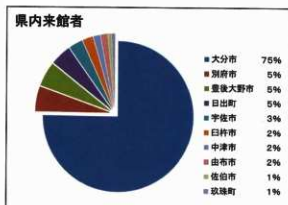
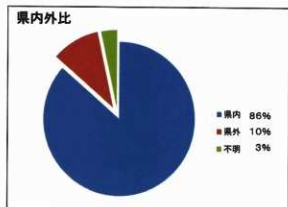
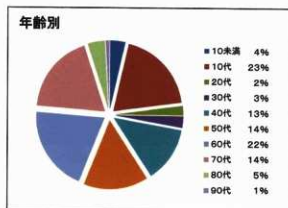
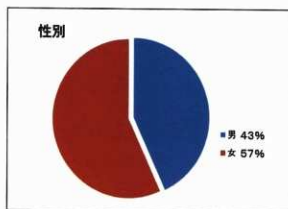


中学生の職場体験

平成30年度 来館者アンケート結果

対象期間 平成30年4月1日～平成31年3月31日

来館者 17,377人 回答者 315人 回答率 1.8%



V 安心・安全な施設づくり（危機管理向上）

当センターは、発掘調査で出土した重要遺物を保管する収蔵庫や「豊の国考古館J」、「BVNG O大友資料館」の展示施設、歴史体験学習館を有している。そのため、文化財の保護や入館者の安心・安全を目的とした危機管理能力向上のための研修を年8回実施している。

研修内容には、警察署員を講師に迎える不審者対応実技訓練、消防署員を講師とする初期消火や入館者の避難誘導訓練や救急救命訓練のほか、地震や火災に対する初動体制の確認等がある。

第21表 安心・安全な施設づくりに向けた研修一覧

項目	期日	目的	研修講座の内容	講師等	参加者
1 入館者の安心・安全	6月25日	不審者対応	不審者対応実技訓練 講義	大分中央警察署員	27名
2 職員防災スキル向上	7月23日	館内非常機器取扱い	館内非常機器取扱い説明	新日本防災設備㈱職員	11名
3 入館者の安心・安全	8月6日	救急救命法 (心肺蘇生)	救急救命法 (AED研修含む)	大分中央消防署員	14名
4 入館者の安心・安全	9月3日	地震時の安全確保対応	地震時の1分間の安全行動	大分市との連携 (シェイクアウト2018)	14名
5 入館者の安心・安全	9月3日	災害時の初動対応の確認	地区災害対策本部と連携した初動対応訓練（職員の安否確認等）		21名
6 文化財保護	10月9日	被災地の文化財保護	地震被災地における復興支援	熊本県派遣職員 日田市文化財担当職員	23名
7 文化財保護 入館者の安心・安全	1月28日	文化財保護 入館者誘導	文化財持出し・初期消火・ 避難誘導（文化財防火デー (1/26) 対応行事）	大分中央消防署員 新日本防災設備㈱職員	19名
8 入館者の安心・安全	2月17日	火災発生時の避難誘導	「考古学講座」開催中の火災発生に伴うボランティアスタッフを活用した受講生避難誘導	埋文ボランティアスタッフとの協働	27名

埋蔵文化財センター要覧

1 沿革

- 昭和45年(1970)4月 社会教育課内に文化係設置
- 昭和46年(1971)4月 文化室(文化財係)設置
- 昭和47年(1972)4月 文化課設置
- 昭和53年(1978)6月 大分市舞鶴町に埋蔵文化財資料保管・整理用の作業所設置
- 昭和56年(1981)4月 文化課に埋蔵文化財係設置
- 昭和62年(1987)4月 埋蔵文化財第一係・埋蔵文化財第二係の2係体制
- 平成9年(1997)4月 舞鶴町の作業所を大分市中判田の工業試験場跡に移転
- 平成16年(2004)4月 教育庁埋蔵文化財センター設置
総務課・調査第一課・調査第二課の3課体制
- 平成21年(2009)4月 管理予算班・一般事業班・大型事業班・受託事業班・資料管理班の5班体制
- 平成26年(2014)4月 管理予算班・県事業班・受託事業班・資料管理班の4班体制
- 平成27年(2015)8月 旧芸術会館跡地への移転が正式決定
- 平成29年(2017)2月 旧芸術会館にて業務開始
- 平成29年(2017)4月 大分県立埋蔵文化財センター発足
総務課・企画調査課・調査第一課・調査第二課の4課体制

2 施設の概要

(1)施設の場所 大分市牧緑町1-61

(2)規模

敷地面積	18,924.64㎡
建築面積	4,345.37㎡
延べ床面積	7,301.98㎡

(3)主な施設

- ① 管理棟(1,404.9㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート3階建
所長室・事務室・第2講座室・入札室・会議室
- ② 展示棟(3,108.35㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート2階建
豊の国考古館(459.25㎡)
BVNGO大友資料館(599.80㎡)
考古情報室・第1講座室(174.96㎡)
- ③ 整理収納棟(2,629.79㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄骨鉄板3階建
整理作業室・一時保管室・写場・収蔵庫
- ④ 歴史体験学習館(158.94㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート1階建

4 管理規則・利用規則

(1) 大分県立埋蔵文化財センター管理規則

平成二十九年四月一日

大分県教育委員会規則第九号

大分県立埋蔵文化財センター管理規則をここに公布する。

大分県立埋蔵文化財センター管理規則

(趣旨)

第一条 この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の組織、運営その他必要な事項を定めるものとする。

(課の設置)

第二条 センターに、総務課、企画普及課、調査第一課及び調査第二課を置く。

(総務課の分掌事務)

第三条 総務課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 公印の管守に関すること。
- 二 文書の收受、発送、編集及び保存に関すること。
- 三 職員の仕事、服務、研修及び福利厚生に関すること。
- 四 予算の執行並びに現金、有価証券及び物品の出納命令に関すること。
- 五 関係行政機関及び関係団体との連絡調整に関すること。
- 六 施設及び設備の維持管理に関すること。
- 七 施設及び設備の利用に関すること。
- 八 その他他課の所掌に属さない事項に関すること。

(企画普及課の分掌事務)

第四条 企画普及課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 出土品その他埋蔵文化財に関する資料の保存及び展示並びに体験学習の実施に関すること。
- 二 歴史及び考古についての講演会、講習会等の開催に関すること。
- 三 県民の歴史及び考古に関する調査研究活動を援助すること。
- 四 学校、図書館、研究所、博物館、資料館、公民館等の諸施設に対する歴史及び考古についての協力及び活動の援助に関すること。
- 五 埋蔵文化財についての目録、年報、案内書、図録、調査研究の報告書等の刊行に関すること。

(調査第一課の分掌事務)

第五条 調査第一課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
- 二 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
- 三 県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(調査第二課の分掌事務)

第六条 調査第二課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
- 二 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
- 三 国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(職員の職)

第七条 センターの職員の職として、次の職を置く。

- 一 所長
- 二 副所長
- 三 参事
- 四 課長
- 五 課長補佐
- 六 主幹
- 七 副主幹
- 八 主査
- 九 専門員
- 十 主任
- 十一 主事

- 2 所長の職は、非常勤とすることができる。
- 3 所長は、上司の命を受け、センターの事務を掌理し、所属職員を指揮監督する。
- 4 副所長は、所長を補佐し、センターの事務を処理する。
- 5 参事は、上司の命を受け、専門的事項の指導及び助言に関する事務並びに特定の事務を処理する。
- 6 課長は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
- 7 課長補佐は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
- 8 主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
- 9 副主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
- 10 主査は、上司の命を受け、事務を処理する。
- 11 専門員は、上司の命を受け、事務を処理する。
- 12 主任は、上司の命を受け、事務に従事する。
- 13 主事は、上司の命を受け、事務に従事する。

(職員の数)

第八条 センターの職員の数は、教育長が定める。

(委任)

第九条 この規則に定めるもののほか、センターの管理に必要な事項は、教育長が別に定める。

附 則

この規則は、公布の日から施行する。

(2)大分県立埋蔵文化財センター利用規則

平成二十九年四月一日
大分県教育委員会規則第十号

大分県立埋蔵文化財センター利用規則をここに公布する。

大分県立埋蔵文化財センター利用規則

(趣旨)

第一条 この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の利用に関し、必要な事項を定めるものとする。

(利用時間)

第二条 センターの利用時間は、午前九時から午後五時までとする。ただし、入館は午後四時三十分までとする。

2 大分県教育委員会(以下「教育委員会」という。)が、特に必要があると認めるときは、臨時に前項の利用時間を変更することができる。

(休館日)

第三条 センターの休館日は、次のとおりとする。

一 月曜日(その日が国民の祝日に関する法律(昭和二十三年法律第七十八号)に規定する休日(以下単に「休日」という。)に当たるときは、その日後において、その日に最も近い休日でない日)

二 十二月二十八日から翌年の一月四日まで(前号に掲げる日を除く。)

2 教育委員会が特に必要があると認めるときは、前項の休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

(利用制限等)

第四条 所長は、利用者が次の各号のいずれかに該当し、又は該当するおそれがある場合は、その入館を拒否し、若しくは退館を命じ、又は利用を制限し、若しくは利用を停止させることができる。

一 出土品その他埋蔵文化財に関する資料(以下「資料」という。)並びにセンターの施設及び設備を故意に亡失し、汚損し、若しくは毀損し、又はそのおそれがあると認められるとき。

二 資料の返納を故意に怠ったとき。

三 定められた場所以外で喫煙又は飲食したとき。

四 めいていし、大声を発し、若しくは危険物を持ち込む等の利用者に迷惑を及ぼし、又はそのおそれがあると認められるとき。

五 その他管理上支障があると認めるとき。

(資料の館外貸出し)

第五条 資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、所長が特に必要があると認めた場合については、この限りではない。

(委任)

第六条 この規則に定めるもののほか、センターの利用に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附 則

この規則は、公布の日から施行する。

大分県立埋蔵文化財センター 研究紀要 3

令和2年3月31日 発行

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター

〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-6-1

電話 097-552-0077

OITA PREFECTURAL CENTER
FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

BULLETIN

Vol. 3

Esoteric Buddhist Paintings owned by Ganjo-in Temple 1

WATANUKI Shunichi

Jar shaped Haniwa (cray images) excavated
from Yokoo Kaizuka (Shell mounds)

HATTORI Masakazu

Archive Annual Report (Fiscal 2019)

Archive Directory

March 2020